

弘仁歷運記考



5
2163

門 = 5
2163
卷

弘仁歷運記考序

天地乃依相極所知行挂卷母

畏伎吾

皇御孫命能神隨始給比斯道

波霜言靈乃太須玖流國辭王

能幸布國登言余傳日文迹記

○弘仁歷運記考序

書圖金宗
年正月
朝書

555

氏^テ大^オ良^ホ加^ラ爾^カ穗^ニ之^オ玖^ダ天^ヒ上^レ之^ク儀^ア
能^メ麻^ニ二^ニ弥^イ繼^ツ二^ツ爾^ニ言^イ次^ヒ比^ロ
語^カ繼^タ比^ツ氏^ガ堅^ヒ石^テ介^カ常^キ石^ハ介^ニ動^ト那^キ
玖^ク那^ナ母^モ在^ア祁^リ流^ル乎^ヲ三^サ枝^キ乃^ク中^ノ津^ナ
御^ミ代^ヨ介^ニ佐^サ比^ヒ豆^ヅ留^ル耶^ヤ言^コ痛^チ伎^タ漢^キ
書^ブ伊^イ渡^ワ來^タ而^リ吾^ガ

皇^{スメ}國^ラ之^ミ古^ク昔^ニ人^ノ母^イ漸^ニ心^シ佐^ヘ久^ビ自^ト
利^リ乍^ツ萬[、]其^ヨ介^ロ習^ソ經^レ止^ニ斯^ナ且^ラ所^フ謂^ト
周^シ姬^ウ昌^ノ云^キ佐^シ加^ウ斯^チ良^フ人^カ乃^シ偽^ラ設^ビ
多^タ流^ル其^ソ赤^ノ縣^モ州^コ乃^レ歷^ノ代^ヨ史^ツ能^ブ甚^ミ
遙^ハ在^ル空^ツ箕^カ空^ゾ年^ヘ紀^ソ介^ラ麻^ト自^シ許^ダ良^テ
延^エ互^テ挂^カ麻^ケ久^マ波^ク雖^ハ畏^カ
弘仁歷運記考序
二

皇御孫命乃天降坐之從王手
次畝火山余治天下

天皇乃大御代左右百萬七十

万何止氣長伎年數記加之與

理空蟬乃在間能物識人母思

迷惑筒其乎真實乃年歷止之

母大船乃信美耶思斯鈞乃宇

氣繩受引也為斯

皇典余佐閉書入而在者甚母

由二敷事余那母阿留其所乎

霜吾師神風伊吹屋平大人伊

璞乃年月麻年久慨思保之坐

豆。淺茅原。委曲。余。思。米。具。良。斯。
 味。酒。呼。加。牟。賀。倍。明。斯。氏。被。著。
 在。此。乃。弘。仁。歷。運。記。考。與。此。有。
 愛。伎。御。書。乃。瓢。形。能。天。下。余。伊。
 行。經。良。奴。夏。乎。甚。惜。斯。美。思。在。
 余。合。世。豆。今。般。岩。崎。長。世。之。氏。

伊。吹。乃。屋。余。乞。申。勢。流。乎。此。書。
 善。伎。余。止。宜。須。大。人。乃。命。恐。美。
 松。井。美。澄。原。信。好。余。毛。語。比。計。
 良。久。爾。魂。相。乍。於。耶。自。心。余。思。
 起。斯。豆。頌。氏。如。此。櫻。木。爾。花。令。
 開。豆。天。下。余。薰。滿。牟。登。爲。留。者。

○弘仁歷運記考序
 ○四止

信濃國伊那郡麻績里人。

北原信實

信濃國伊那郡麻績里人。北原信實。其美影原。於今主。諸君。信。善於命。土直。良大人。命。怒美。如。八。皇。命。了。中。營。流。半。北。書。

弘仁歷運記者序



掛卷毛綾尔畏也。小治田大宮乎天下知看之。天皇の八年のひし年。新羅任那。兩國の酋長等。賀奉。里。表。文。尔。天上乎神。あ。尊。地。日。天皇。河。理。是。二。柱。此。神。字。除。了。は。何。う。亦。畏。事。有。乎。甘。今。う。祭。以。後。は。船。柁。乾。き。受。年。毎。年。必。朝。貢。奉。ら。む。と。奏。物。り。し。形。名。誠。日。遠。

○弘仁歷運記者はし加き

津神代の御傳説は幽契子符合比多。青海原
潮の八百重の留る限は戎夷等は。天地の共
必かく有ぬ信氣理ありと云。然るも三粟の
中津御代と云。其諸蕃の国と云り。事は物
其善事や。種々貢物奉さる中へは。善事
惡事は行は。凶事も吉事も理あり有と
傳。其上邊の言善事蕃語を。相率あり相口會

る。下濁きは穢惡と云。穢や辰思は多。數多
乃年月年經るは。遂に華夷内外の
差別成も分る。萬事を裏表に心得る人
出來は。最も歎く憤るに極むる。爰に
吾氣吹舍大人を。故鈴屋翁の御教を受繼
る。其然有信氣理を熟に悟得給は。然る
世人等も教導する。彼日の没學西戎の

子棹^{サヲカゲ}于^ホ多^ホ。千船八千船^{チフネヤチフネ}。朝貢^{チウコン}
 奉^{ホウ}石^シ多^タ。阿那^{アナ}樂^{ラク}。愉快^{ユウキ}
 斯^{カク}云^イ少^シ。參^{サン}河^カ國^{クニ}。渥^{アツ}美^ミ郡^{クニ}。吉^{ヨシ}田^ダ方^ガ鄉^{タウ}。羽^ハ田^ダ村^{ムラ}。子
 鎮^{シツ}座^ザ坐^リ。皇^{ミコ}大^{オホ}御^{ミコ}神^{カミ}。廣^{ヒロ}幡^{ハタ}八^{ヤチ}幡^{ハタ}。大^{オホ}神^{カミ}の兩^ニ官^{クニ}。尔^ニ
 仕^シ奉^{ホウ}る神^{カミ}主^{ヌシ}。羽^ハ田^ダ埜^ノ常^{トコ}陸^{リク}敬^{キョウ}雄^{ユウ}

弘仁歷運記考上之卷

大塵 平篤胤謹撰

門 參 草鹿砥宣輝
 人 河 竹尾正寛
 國 寺部宣光 校 同

是弘仁歷運記といふ書。印本延喜式の卷首出たる。其
 撰者も何人ぞ云ふに詳ならず。嵯峨天皇の弘仁に記せ
 書形跡あり。本文。今上弘仁二年辛卯。云牙依語に有
 るあり。明^{アキラカ}あり。延喜式を奏進られしは。延長五年十二月
 書著せる記あり。此天保二年辛卯。斯て題名に下し。今名公卿
 記とあり。實も歷運の事を記せるは。僅り今此本文引

出依五章れみおて。末は御々代く小。官職の沿革あてし事
どを成記して。公卿補任の祖書と云るを體裁おて。初と
後をハ。似おるぬ書れり。まこ此記はらよ式おと。與る事お
るべきり非。決。米。て後人の取副。とるれらむ。近頃出雲國
守れ訂正本。小。貞高本と云ふり。此記を載ざる小。據りて。此
を首り擧げ。考異り收ら故今は。其歷運は關ヶ依事れみお
條くして。考を加ふるり。此を和漢合運圖に祖書とも云る
き物あるが。其説粗く。差誤も多うれど。中おを和漢お通る。
い中珍志た。古説をも載とる書あり。次く小。説著を成見て
知依るし。いでや。靈幸はふ。神世に御代の來經なれり。數
おぬる世成とみおきて見む。

一 按本紀等諸書昔者天津彦火瓊々杵尊初從降始王西土
次彦火々出見尊次彦波斂武鸕鷀草葺不合尊摠三代經
一百七十九万二千四百七十餘歲竝時世邈遠事迹神異
具于舊記更不煩述

按本紀等諸書とは古事記日本書紀等也。本紀のみおらる。
他諸書をも數やて竝る按牙とる由なり。紀。字を京極宮御
本よ記を作れど
此。日本紀。始。免。諸書を云。は。て。天津彦火瓊々杵尊。初
て。聞。ゆ。れ。ど。紀。字。勝。る。べ。し。免て天降坐せる事を説むる先是ふ。天地初發の時をり。
此天皇尊尔至依まで。大略な説あり。下小攷ふる條
條中よ。ゆくて無く聞ゆる事等あり。故先ぞ此事を云

むる。天地未生也。時をり。天御虛。天之御中主神。おは
し坐て。此神。此御靈。小因。大空。其状言ひ難。一物
生出。此大神。御名を。次。高皇產靈神。皇產靈二柱神。おは
上皇太一と傳へ。此大神。御名を。次。高皇產靈神。皇產靈二柱神。おは
坐。此二神の御靈。小頼りて。其一物。始めて。二り分判
て。天地と成れ。天地と成。定まり終る間を。赤縣州
名を。盤古眞王。大元聖。次。天地已小成立し終る時。上
母。夫妻と傳。多。次。天地已小成立し終る時。上
件。此天神。伊邪那岐。伊邪那美。二柱神。小。天瓊矛を賜ひ
て。言依し給ひ。世間の事。始給。是。即。伊邪那岐神。此元
年あり。赤縣州古説。此二神を。天皇氏。地皇氏。と傳。天
地。此成立し。竟て。天皇氏。の世間。此事。始給。へる。歳

甲寅の歴運。不當。依。傳。子。り。故。是。説。小。依。りて。此。をり
以前。此。歴運。を。推。求。む。る。や。彼。物。の。生。出。さ。る。初。年。ま。と。其
物の。二。り。分。じ。し。初。年。と。を。甲。寅。此。機。運。當。り。其。末。年。を
共。小。癸。丑。と。當。れ。り。是。故。小。伊。邪。那。岐。神。即。天。皇。氏。の。元。年。亦
甲。寅。乃。斯。て。此。二。柱。神。既。小。大。八。嶋。國。を。生。坐。し。蒼。生。の。祖。と
運。あり。斯。て。此。二。柱。神。既。小。大。八。嶋。國。を。生。坐。し。蒼。生。の。祖。と
依。八。百。万。之。神。ま。と。万。物。を。生。給。ひ。然。して。後。り。風。火。金。水
土。此。神。等。れ。と。造。化。を。掌。依。神。と。生。給。ひ。伊。邪。那。美。神。已。り
豫。美。都。國。り。避。坐。て。此。ち。伊。邪。那。岐。大。神。筑。紫。日。向。の。橘。小。戸
小。て。禊。祓。し。給。ひ。天。照。大。御。神。と。健。速。須。佐。之。男。神。と。生
給。ひ。大。御。神。を。天。日。此。御。國。事。任。し。須。佐。之。男。神。は。此
大。地。を。御。言。依。し。て。御。親。を。日。少。宮。小。そ。上。昇。り。給。多。め。依
伊。邪。那。岐。伊。邪。那。美。神。の。世。り。御。坐。せ。る。年。間。を。赤。縣。州。古。説
り。天。皇。氏。地。皇。氏。相。俱。ひ。て。甲。寅。の。歳。と。り。一。万。八。千。歳。と。傳

牙より然れど此末カシコ、故是を以て。天照大御神を。天日此御國
年もまご癸丑なり。故是を以て。天照大御神を。天日此御國
を無窮に治看し。速須佐之男神。よ此御國に御坐して。四
方八方に蕃國に成併せて。盡り去らば看々也。雲州樋河天
二百三十四万四千六百五十年昔と云る下。此本注より。自天
照皇大神即位甲寅至今。大永三年癸未也。と云へる説あり。
此歴數を論ふ。不足らば。大御神の元年を甲寅と云ふ事
も。古傳を兼とる説を聞えて。上下小擧る。赤縣此古説とも
能く合り。其を伊那那岐神の末年を癸丑ふ。小大御神の
高天原字をろし看せる元年。須佐之男神の天下を治看せ
る元年。共り甲寅なり。ちて須佐之男神。天上に參上りて。大
御神と御誓ひ。此中。御子生給るを始め。種々の事故あ
り。其より天乃壁立極み。蕃國に成看行はし。御國此地に還
坐して。御子阿まご生給る中。八嶋篠見神。そ乃御子小。

天葺根神。そ此御子小。大國主神あり。斯て後。須佐之男神。
おひる豫美都國に入坐して。月夜見大神と成給牙也。此大
現世に御坐せる間の年數も。皇國小其傳牙洩されど。是ま
と赤縣に古説あり。皇氏と稱せるも。乃此大神をて。天
地二皇に紹きて。世に御せる間。三千三百歳なるが。其元年
を甲寅ふ。と見ゆ。然れど。彼天淵記に。大御神の元年を甲
寅とあゆむ。熟く合牙。ちて須佐之男神。月夜見命と成給
牙。後。御子八嶋篠見神。御孫天葺根神。御曾孫大國主神
と。次く。御國字をろし看る。順次は有れど。此を壽短
死人世に議小こ。有れ。須佐之男神の。世に御坐せ。依間久
々れど。御子に御孫も。共り御齡高く坐おる。共く。國造也
此事小勞。給ふ字。須佐之男神。そ成見立多。乃此大國主神

生坐して後豫美都國ヲ入坐し。此神の御世甲寅此元年小
夜見國ヲ入ませる年
其後大國主神お若くて八十神此
枉事小とて其國ヲ往坐し須佐之男神の稜威の御靈を
受賜はり現國小還て給ふと即加此八十神字追退々て大
國主を給り給する事の運かれど須佐之男神此次は乃大
國主神の御世と申はむも誣言形らば是を以て大國主神
を直須佐之男神此御子と申せ流傳もあり。又按ふ須
佐之男神の
豫美都國ヲ入坐せる歳癸丑あきバ大
國主神此御世はじ免を甲寅年小當れ也
ちて大國主神此
御子言代主神そ純嫡子をして百八十一神あり未と言代
主神も御子御孫曾孫玄孫れど數おはして十七世の神

世と申せる傳もある許されむ其親族といや多形也
也知る其み形大國主神の功績を助け奉て國造り此神
業は更あり謂は流經世此術治民の用と依事物ども皆此
大神の御世制作も給ひ大抵世此風俗を赤縣の唐虞以
前此趣おぞ開多ける。今先大、小、如、此、云、ふ、由、を、然、る、り
下、不、委、く、説、く、後、於、へ、し、然、る、り
此時しも高天原小て天照大御神の大詔命もて豊葦原水
總國は我が御子此可治國ありと詔ひて天穗日命武甕槌
命れど天降して其大國主神ヲ言問多まひ殊り高皇產靈
神の御言もて汝が治せる現事也皇美麻命小治し免汝を
神事を治せ也猶慇懃お依御會釋ども有しらば大國主神

○弘仁歷運記考上
○五

子往坐し小依りて大なる功をさす。天下を經營し給たりしこと、上段より見え、この如く、今此御國を天神御子に奉りて、まこと終り、其國に隱居し、去りて渡り、理あはれり、神の海底に隱居し、其國に隱居し、去りて渡り、理あはれり、と云ふも、漢意あり、非なり、言れど、是を謂ふ、ふど、切あり。大御國に現世を避坐して、未だ赤縣州に渡坐さば、以前に其親族の有らば、盡くし、交帥坐して、先豊國に伊波比洋ある。姫嶋に隱住まし、其とて次く、彼處に渡り給ひたり。此も師國主、神の御末を悉く、此御國に殘らば、まじき道理あり、これを皆黄泉國に避給たり、と有れど、委らば、予が三五本國考をみて、知但し、此を既し、小隱坐せる後、此事なる故に、我が神典には、其詳ある傳り無れど、彼邦の古書とをり、其履歴のや諦に記し傳りて、太皐伏羲氏と聞えしは、即是大神に漢名

ありて、其始免て、馭戎し給り、元年を庚申、歲形あまを、既し、小春秋命歴序考る、著せ、あが如し。但し、上注せる如く、此大神そと赤縣に傳り、人皇氏、没、狹、神、氏、次、之、と、有、る、狹、神、氏、此、元、年、也、同、年、あ、る、が、狹、神、氏、黃、神、氏、次、民、氏、辰、放、氏、離、光、氏、柏、皇、氏、と、云、る、六、氏、相、繼、な、て、甲、寅、より、己、未、あ、て、千、六、百、八、十、六、年、此、間、彼、國、より、王、あり、し、字、其、千、六、百、八、十、七、年、小、當、る、庚、申、歲、に、伏、義、氏、の、出、興、せ、給、り、由、あ、れ、ど、大、國、主、神、に、現、り、御、斯、國、を、治、給、へ、る、を、乃、そ、此、千、六、百、八、十、六、年、此、間、形、り、斯、其、赤、縣、州、に、渡、り、給、ふ、時、し、己、命、の、世、に、行、ひ、給、り、る、事、物、器、械、の、類、ひ、盡、く、幽、世、に、收、免、て、其、風、俗、を、し、赤、縣、に、移、し、給、り、牙、に、其、を、此、後、し、と、御、國、を、天、神、に、御、子、の、御、世、と、革、れ、ど、天、地、御、國、に、風、俗、を、行、給、ふ、事、を、所、思、看、せ、る、故、に、あ、は、れ、し、果、して、皇、美、麻、命、御、天、降、の、後、を、そ、ゆ、御、風、儀、乃、漸、く、小、弘、は

○弘仁歷運記考上
○七

りて。古語小言擧せ慈國と云。依如く。天國の純一なる風
移正來ぬる哉。彼赤縣を。次く小。ちかした方ヲ開けし故ヲ。
此方何事も却正て。彼を後と依様見ゆきど。此はし
は。實は。此方此風土の純固にして。彼方此風土は。薄惡なる
が故。依こそ。先師も既尔言れあるが如し。皇國を皇美
せる後を。高天原此風儀ヲ移正々む事を。其御天降の時
皇産靈神此太玉命小勅牙る御語不。宜率諸部神而供奉。如
天上之儀とある如く。後まて其儀ヲ因循ひ給ふを以て知
べく。依と大國主神の彼邦ヲ傳牙給ひし事物風儀を。唐虞
此世まて大抵難か。傳はり給ふ。其後を擬聖の徒。多
次く小出て。狡意を先とち。道此故實を失牙る事ども
多あり。其は赤縣太古。或人問て云く。赤縣を。同じ大神
傳小云ふを見。或人問て云く。赤縣を。同じ大神
開交給牙る。然らば。言語も。此方此を傳牙交を。教化も施し

難交道理。然る小。彼と此。言語此甚く異。依こそ。何ぞや。然
れを彼邦を。此方此神等の。開交給牙めと云ふも。大國
主神此御世。事物器械乃類ひ。皆具はれ。言ふも。神
典ヲ。ちる故事。此所見。依れ。信られ。慈事。答御國の
同じ國內。方言とて。異なる。多交。況て神此生給
牙る御國と。潮沫の凝成れる末國也。甚く隔。依域。して。
其蒼生の始也。神此生給牙ると。蠢化せる。依。差あれ。を。
其言語。此異。依。固。り。訝。依。足ら。神を禽獸の語
を。さ。知。給。其。蠢民。が。戎語の。依。小。其意。を知り
て。音語を用ひ。文字をも制。其國風の語法。依。定。給

ひし故^カ。彼^カを此^コと。言語の甚^イく異^カれるれ^レ。但^レしあ^カる^カ。赤^シ縣^コ。餘^ノの國^クも皆^ニ我^ガ大神^トとち^ニ御^ノ徳^ヲ小^シたり^シ。立^テざる國^ト有^ル。去^リと無^クれど。其^ノ言語^ヲを各^々異^ニれり。然^レれど其^ノ國^トは未^ダ教^ヲ牙^ヲ導^キ給^フ。牙^ヲ思^フはむ人^トを疑^ヒ有^ル。あ^リま^シ。及^ビ。ち^ニ大^ニ國^ト主^トを^シ。我^ガ神^ト御^ノ世^ヲふ。事^ト物^ト風^ト俗^トも何^レ大^ニに開^キる^ル。在^リし^レを謂^フふを。我^ガ神^ト典^ト。然^ルる故^レ事^ト此^ト所^ニ見^ルあ^リし^レを疑^ヒ思^フふ^ル。然^ルる事^トあ^リ。のら。上^ニふ云^フ。依^テ如^ク。赤^ニ縣^ト州^ト。伏^シ義^氏と聞^クゆる事^ト。大^ニ國^ト主^ト神^トある。我^ガ天文^ヲ。地理^ヲ。度量^ヲ。文字^ヲ。易^ヲ曆^ヲを始^メ。民^ヲ用^ヲを綱^ト紀^トを爲^ス。き道^ヲを。悉^クそ^レを制作^スある^ルを。彼^ノ國^ト籍^トど^モよ所^ニ見^ルさ^レゆ。此^レは彼^ノ方^ヲ傳^ハる^ル説^ヲ依^テ故^レ。其^ノ國^トあ^リて有^リし事^ト此^ト如^ク傳^ハる^ルれ^レ。實^ニ此^ト方^ヲな^ス。制作^スし給^フ。牙^ヲ持^テ渡^ルめ給^フし^レも多^ク。

う依^テこ^ト疑^フあ^リ。其^ノ龜^トト易^道と^モ小^シ我^ガ神^典ある^ル。太^ニ極^ト。原^始ある^ル事^ト。三^ニ易^道由^リ來^リ記^スは^シ。太^ニ果^ト古^ノ易^傳云^フ。度^量。此^レ我^ガ古^ノ尺^ヲを減^ジて傳^ハる^ル給^フし^レを起^ルる^ル事^トは。赤^ニ縣^度。制^考小^シ論^ハ。曆^算を皇^國此^レ域^ヲあ^リて創^メ給^フ。事^ト三^ニ五^本。國^考。ま^ニ天^朝無^窮曆^論。牙^ヲ准^ズ。其^ノ餘^ノ事^ト等^ト此^レ原^始。我^ガも想^ヒ量^リ。う此^レ考^フの附^録と^シて大^ニ國^ト主^ト神^トを^シ。小^シ。を^シ。古^ノ銅^器此^レ考^フを^シ。合^セ見^ルる^ル。ち^ニ大^ニ國^ト主^ト神^トを^シ。小^シ。國^ト避^ク給^フし^レ。は。高^ニ天^原。天^照大^ニ御^神。此^レ太^ニ子^ト。天^忍穗^耳。尊^ト。天^降坐^サさむ^ト。其^ノ裝^束給^フ。間^ハ。御^子。天^津彦^火瓊^々杵^尊。生^シ給^フ。牙^ヲ。故^レ是^レ御^子。天^降し坐^サむ^ト。請^フ給^フ。牙^ヲ。皇^孫彦^火瓊^々杵^尊。々^々。尊^ト。此^レい^ハ。幼^稚く御^坐せる^ル。即^チ天^日嗣^ノ高^ニ御^座。小^シ。坐^サ奉^リ給^フ。鏡^劍二^ニ種^トの天^璽。及^ビ八^尺句^瓏。ま^ニ齋^庭の。稻^穂を依^テし賜^フ。五^部此^レ神^等を支^カ。牙^ヲ。天^降し給^フ。牙^ヲ。

筑紫の日向此高千穂峯の天降著して其處の宮敷坐せる
を。今注本文の初從降始王西土と云云牙り。委くは古事記
神代紀古語拾
遺あど哉見斯て彦火瓊々杵尊を天降坐せし年かの
賜はせし齋庭の穂字御田作りて其十一月の初免て大
嘗祭あり是ぞ此御祀の起原也ける。此大嘗祭此時
中臣此宜る天神壽
詞の傳り依りて云れり斯て此年大歳扱ふ瓊々杵尊
辛酉の傳り依りて云れり斯て此年大歳扱ふ瓊々杵尊
そは御齡の末は大山祇神の女木花之咲耶毘賣命哉御覽
たて其父を乞ふ遣せれど大山祇神歡びて其妹石長比賣
命哉も副て進て給牙り。此御后問を過々藝命御齡の末あ
爰り瓊々杵尊をば一夜婚初れど石長比賣

哉を見畏て返し給ひしらば大山祇神歎て二人を並
たて進れる由を石長比賣を使はしむ。天神御子比御命
を堅石常石を坐あ手咲耶毘賣を使しては木花の榮ゆる
ごを榮え坐むと誓ひて進れる也。今石長比賣を返して木
花之咲耶毘賣哉のみ留を給牙り。天神御子比御壽を木花
のごを脆ひ坐れむ。白し給ひて世人の命短折記事本
あり也。神典を見えとめ。木花咲耶毘賣は櫻樹の精靈也坐
故其義をわして此御妻問はしも天神御子比賣を立給
ふ始ふれど前を咲耶毘賣をと乞給へれど石長比賣を副
て是れ此比賣哉使はし給ふ事も有むと心問ひて進ら
る命の短くぬき事大山祇神の詠ひ依れり事短く如
く解れとるを委らる實は木花を羨しけり依れり事短く如

く石を醜くけれど無窮ある道理の具はれるを石長比賣
を退々て咲耶毘賣を使給する故其祥の有ふて誓ひ
の驗うは非交思ひ斯て木花之咲耶毘賣命は唯一夜婚れ
過まる事ありき
て生坐せ依御子二柱あり御兄を火須勢理命と申し御弟
は即彦火々出見尊とて太子小御坐たり彦火瓊々杵尊の
崩御せ依後と此尊天比下を所知看して五百八十歳ぐち
と高千穂宮ふ御坐せ依そは御齡の末御兄火須勢理命
と互り幸易し給ひて御兄の鉤を失ひ給する其を甚く
請責して止はれ故せむ方れとて海邊よ泣吟ひ給られむ
鹽土老翁來て相計り無間籠の小船を作して其船り乗
せ參らせて海宮ふ速ぐし遣奉れる小大綿津見神そは御

女豐玉毘賣命を婚せ奉りて赤女魚比口ふ有は依彼鉤字
取りて參らせ御兄残伏牙給ふる種々術とを教へ奉
りて還し奉り給ひしるば其教の如く去て遂に火須勢理
命を治給すなり此火々出見命は是等此事とを成も五百
未形り云ふ事由も八十歳ぐちと高千穂宮ふ坐たる御齡は
下論ふを俟るし斯る後加は豐玉毘賣命海宮より
來り給ひて前ふ海宮ふて姓み給する火々出見尊の御子
鶺草葺不合尊を産給すなり然て豐玉毘賣命を遂に海宮り
還り給ひ後ふ其弟玉依毘賣命を遣せて其御子を養はし
給すなり葺不合尊成人ふあて給ひて父尊の崩御々むあ
や申はも更あり葺不合尊のち小御姨玉依毘賣命残后と

たて。御子四柱字生給牙。彦五瀬命。次彦稻冰命。次三
毛入野命。次神倭磐余彦命。是ぞ本文ヲ謂ゆる。三代
の大略あは。古史傳ヲ注せるを見るべし。此三御
代此年數を。一百七十九万二千四百七十餘歳と云。神
武天皇紀も。天皇此御言とたて。如此有れ。此は古事記
の總々出見命。高千穗宮。五百八十歳坐。崩御せ。所
此傳。凡そ神代の年數のこ。今是をか。のこ論はむ
は。中々未し。事小思ふ。人有る。然ら。此も如
此見え。書紀も所見とれ。必等閑。過次。非。神
武天皇紀。首。自天祖降臨。以逮于今。一百七十九万二千

四百七十餘歳と有。三御代の總々此年數。此年數
は。多々久し。記を。近世。生。か。し。人。の。心。を。信。ら
れ。ぬ。事。小。思。ふ。の。種。の。説。有。れ。ど。皆。漢。意。に。か。し。死
形。多。古。傳。に。今。假。り。此。數。を。三。御。代。等。く。分。ち。記。は。
一。御。代。大。凡。六。十。万。歳。許。に。有。る。然。る。故。此。有。五。百。八
十。歳。有。る。も。此。を。短。し。加。純。總。て。此。數。也。甚。く。相
叶。は。さ。ゆ。也。如。何。云。ふ。彼。石。長。比。賣。の。事。を。り。て。父。の
神。此。詛。ひ。申。し。給。ひ。し。小。因。り。至。于。今。天。皇。等。之。御。命。不。長。也
也。有。れ。ぞ。總。々。出。見。尊。を。り。此。方。は。御。命。を。り。短。く。坐。該
き。理。あり。加。純。詛。言。邇。々。藝。命。ハ。關。乎。給。は。其。御。子。より。御
繼。く。成。詛。奉。れる。物。あり。篤。胤。云。總。々。出。見。命。より。以。來。天。皇
命。之。ち。此。御。命。長。く。坐。ち。る。事。は。大

山祇神の詛此驗ハ非也石長比賣を婚さ俊耶毘賣を
 婚給する小因れる驗此を辨ふる如く師説も
 未精のら然まど此御妻問の事とてし如く此
 事此考牙ハ卓れて妙ある説り余分説此因
 ることは云然まど彼一百七十九万云く此年
 も更あり然まど彼一百七十九万云く此年
 多は多
 邇藝命此御世ヲ經過て穗々出見命も僅
 五百八十歳次
 小葺不合命は逾短う依る次小伊波禮毘古命
 に至りて
 又いと縮て百三十七歳を崩坐しふ加は
 此御年此數のこや何は疑ふる然るを倭姫命
 世記
 後世の書等ハ神代此年數邇藝命三十一万
 八千五百
 百四十三年穗々手見命六十三万七千八百
 九十二年葺不
 合命八十三万六千四十二年を記せるもい
 んじ紀妄説
 也

了。神代卷口訣ゆを三十一万八千五百三十三
 年六十三万七千八百九十二年葺不
 少し差あれども三十一万八千五百三十三
 年六十三万七千八百九十二年葺不
 御代次くふ加く御命長く坐む由あり
 命ハ然ばのり長く坐る依小其御子此神武
 天皇は俄縮
 了。僅り百餘歳あてし何此由をせむ最
 心得
 此よ至て加純詛言此驗の顯れざる也とも
 云む然れ
 也二御世殊り長く坐て其を過て後
 俄驗此顯はる
 彦きふも非ざ依をや。篤胤云神皇正統紀
 天津彦火瓊
 千五百三十三年彦火々出見尊天
 下を治免給ふこと三十一万八
 三万七千八百九十三年葺不合尊天
 下を治免給ふこと六十三万七千八百
 九十二年と云牙り此尊八十三万餘年
 坐る也
 其御子磐余彦尊の御世よ俄り人皇
 此代とありて曆

○弘仁歷運記考上
 ○十三

數も短くれりたることを疑ふ人も有べきや。然れど神道の事、たして測りておこし、誠り警長姫の誼々るまゝ、壽命も短く取てしうば、神のぬるまひも替り、頓て人代をありぬるや、を有り、今此師説を、此義を、含み多し云れしれ也。右此年數も、後人の彼書紀此年數を據りて、其を妄り、三御代を分配して、定えたる物にて、彼詛言此事をも思ひ通さ。此記す此の如く、五百八十歳を有れど、或も考す、次して。唯由り無く、物し多はあり。御世の彌益、長久し加りし由り、祝奉れる心、此三御代の年を合されど、彼書紀の數を、全く同きを、是後人、此所爲れ、依證あり。凡て上代此傳を、かく様の事は、必此を彼と、全く八同じからぬ物あまばれ也。や有也。まに藤貞幹が、衝口發といふ物、神武天皇紀の年數を、何ぞて、此を神代總ての數と、あて、此年

數元より論を、足らば、を、鉗狂人、論ひて、此年數を、自天祖降臨、以逮于今、と、あまは、近々、藝命の天降、坐しよ、て、以、來、あり、其、上文、小我、天祖と、あるも、近々、藝命、取る、て、知、る、し、然、る、を、論、者、今、七、代、五、代、を、合、せ、て、此、年、數、の、如、く、云、る、を、誤、れ、て、忍、德、耳、命、よ、り、以、往、の、年、數、を、あ、ら、わ、せ、る、を、幾、百、万、歳、を、云、ふ、と、を、知、ら、ば、然、て、此、年、數、を、論、を、る、小、足、り、と、云、は、甚、不、審、し、凡、そ、神、代、の、傳、説、は、み、あ、る、大、靈、異、を、も、て、知、れ、る、事、を、解、釋、を、依、人、も、己、ガ、心、の、ひ、く、方、名、様、を、云、ひ、曲、て、今、日、此、事、理、を、合、ふ、さ、は、り、説、か、れ、今、論、者、の、如、く、交、ハ、云、曲、る、事、此、非、あ、る、を、知、る、故、り、然、る、向、り、論、者、の、如、く、交、ハ、云、曲、る、事、代、の、傳、を、取、ら、ず、は、り、向、り、論、者、の、如、く、交、ハ、云、曲、る、事、る、を、り、は、少、し、勝、れ、る、小、似、れ、れ、ど、靈、異、を、以、て、此、を、信、ぎ、依、ハ、又、同、古、漢、籍、意、を、一、代、大、と、そ、六、十、万、歳、を、今、仮、り、其、三、代、等、分、ち、と、き、を、一、代、大、と、そ、六、十、万、歳、を、今、仮、り、當、る、如、く、此、尊、古、事、記、す、總、々、手、見、命、を、五、百、八、十、歳、と、り、て、逾、斯、の、如、く、此、尊、古、事、記、す、甚、短、く、ま、と、神、武、天、皇、に、至、り、て、逾、斯、に、給、り、る、こ、を、必、然、る、べ、き、故、此、有、こ、と、あり、其、由、を、古、事、記

○弘仁歷運記考上
○十四

考素をり神の照覽はし給ふ所あり。此、事此と非、已、
 考、亦、往、往、加、る、夢、想、の、事、あり、管子の、内、業、心、術、あり、
 篇、を、思、之、思、之、又、重、思、之、思、之、而、不、通、鬼、神、將、通、之、
 非、鬼、神、之、九、也、精、氣、之、極、也、と、云、る、加、る、事、や、
 夢、心、を、去、
 は、一、百、七、十、九、万、を、い、ふ、大、數、を、弃、て、二、千、四、百、七、十、餘、歲、と
 有、依、小、數、字、取、れ、と、告、之、依、言、や、覺、え、て、夜、に、明、る、
 待、
 あり、
 机、を、清、免、は、る、更、之、紀、年、類、の、書、と、と、な、取、立、を、考
 ふ、る、小、ま、抄、帝、王、編、年、記、神、武、天、皇、
 即、位、歲、五、十、五、御、宇、七、十、六、年、
 至、丙、子、
 畝、火、檀、原、宮、と、有、依、御
 宇、此、傍、或、七、十、九、年、を、見、え、天、神、祇、王、代、記、と、い、ふ、書、
 昔、
 天、祖、天、降、以、來、至、神、武、天、皇、合、壹、百、七、十、九、万、二、千、四、百、七、十
 九、年、と、あ、り、
 此、天、神、祇、王、代、記、と、い、ふ、書、
 然、れ、ど、書、紀、及、び、今
 此、こ、と、は、未、小、云、を、俟、を、し、

此本文より七十餘歳と有依を、此七十六年をも七十九年
 之と云依小同く。神武天皇の御一世代も總之依常此傳説
 あり。元より天皇の御語れらぬこと。著明あり。故は之惟ふ
 小。既云云如く。大國主神とる。太界伏羲氏を。か此國籍と
 是此古説り。彼地り始免て出興し給ふる年也。庚申とあり。
 此を和漢此紀年を合運して攷ふる小。神武天皇の即位元
 年辛酉より計りて。二千四百一年前此庚申也。
 此、事、
 歷、序、考、ま、さ、赤、縣、太、
 古、傳、を、見、て、知、べ、し、
 然、依、小、其、馭、戎、は、し、
 皇、孫、邇、々、藝、命、
 御、國、を、避、奉、
 給、ひ、し、年、あ、る、こ、と、
 論、ひ、無、く、
 大、神、の、避、
 奉、り、給、
 皇、美、麻、命、
 高、天、原、
 天、津、日、嗣、
 此、高、御、座、

尔即坐し天降す此御支度也種く此事ども有る也登家
 辛酉年ふて御天降やがて其春あまむを推量り然但し
推量れる由を次條より云ふ事あり斯て此天降元年と聞ゆる
 辛酉年をり神武天皇此即位元辛酉年此前庚申年まで順
 小推下せば二千四百年ふて天皇の崩御あまむ丙子年ま
 て計ふれむ二千四百七十六年綏靖天皇即位此前年己卯
 ます哉神武天皇係て計ふれむ二千四百七十九年あま
是めて上より引たる帝王編年記の文は此天神祇然れば本
王代記の文此由あり古説ある事をも辨ふる文此小數ある二千四百七十餘歳を天祖降臨辛酉年をり
 神武天皇の崩後までを算すといふ實數の古説あり此を疑

邪く綏靖天皇此御世を推すし年數あるがかく云ふ由あり
後の世を計すに年數あらむよむ此天皇此御世の年數
をも加すに數ふを死す神武天皇此御世の限りを計すに
る年數あるは以て弘仁以前此古記より所見々むを歴運記
かくハ云ふあり此撰者適うおれを得て年數の甚く少きを厭事小思ひ
て漢籍どもも太古の歳數を云ふなり然る偽妄の多うあり
働ひて一百七十九万此大數を攙入して神武天皇以前か
 此三御代此年數と爲すを其後の人お書紀此分注
 尔加す後ま本文神武天皇此御語を書連するこを疑れ
る然る中根璋が皇和通曆の附録なる古曆法の發端なり
自天祖降跡甲申距神武天皇東征歲在甲寅積一百七十
九万二千四百七十一出于神武天皇之紀距即位歲次辛酉
一百七十九万二千四百七十八算上と記して曆元と爲す

依て彼二十三字の擡入文を信し神武天皇の御語と心得
それ餘歳といふを甲寅此一歳有て其前年癸丑と正算
牙し故に天降の元年を甲申とは云り實小も一七十九
万二千四百七十年を癸丑を本とて算ふれども二万九千
八百七十四甲寅を計牙て三十年餘るをほと癸丑を計
ふきども甲申元年とあれども此七擡入文を欺りれども誤
尔ぞ有、
依て皇孫邇々藝命此天降元年辛酉とり神武天皇
元年辛酉前此庚申まで二千四百年此間を三代をて知看
せる趣を如何と言ふ。其三代此中上下二代此御世の
間此所知あむ小中一代を推及ぶして知れども中一
代の御世の間此み五百八十歳を傳はりて上下二代の御
世此間は替牙奉依る便あし。古事記に日子穗々出見命
者坐高千穗宮伍百八十歳
と有るを師を總とる御齡の事お説れとれども此を本文小
濃く心をお免て視れども高千穗宮に坐て御世をろし看せ

其間五百八十歳と云る傳小て御齡の事うを非也然れど
其實の御齡此あ中長うでし事を申候も更おで。
も彼石長比賣を婚させ木花之咲耶毘賣を使はふ由縁
ふ因りて次く小御命長く御坐あし此謂師説此如あむを
今假り神武天皇の御齡此百三十七歳ある小合せて葺不
合命此御齡を三百歳餘と見奉り強事あれども姑か此神
皇正統紀に周穆王此五十三年壬申とり以後。按る小五
十三年は十
四年小改むるは然るは穆王が五十三年を辛亥とて壬申
は此此十四年小當れども然る小此正統紀のミよ非也
和漢合運圖を始免紀年類此諸書に五十三歳を壬申と有
るを赤縣の紀年書どもあし記せる誤を受とるも其
本は漢此劉歆が三統歴譜の妄小欺りれし者あ二百八十
り委くハ別り著せ依前漢歴志辨を見て知べし
九年ありて庚申小當依年此神隱させ坐く此と有る小

據りて。姑、大統二百八十九年を。葦不合命、此御世の間を定
 免奉^マ。但し正統紀も葦不合命の御齡を八十三万六千四
 此因^マ記され多依小て御世をろし看せる間の年數を謂
 得^マ。強^マ事といひ、姑、をは謂^マ。是を以^マ。其謂^マゆる壬申を。此神
 統元年をある。上、件の年數をたし下れ。神武天皇此前
 る。庚申、歲亦至る。然れ、此を。天皇の中國を。平治竟ませ依
 歲^マ。筑紫小て隱^マさせ給^マ。古事記、書紀小を。此事
 漏^マれど。當時別^マ。據^マ。存^マりて。其を取られし説^マれる
 漏^マれ。東征を。余の書^マ。存^マるも。少^マうら。此傳^マ。ま^マと。渡^マく。疑^マ

も。非^マ。事^マ。は^マ。其假^マ。定^マむる。元年壬申此前。辛未、歲^マ。彦
 總々出見、命^マ。此末年とある。五百八十歳に上れば、壬辰、歲^マ
 了^マ。至^マ。依^マ。これ總々出見、命^マ。此御世の。元年あり。是^マ。赤^マ。縣^マ。小^マ
 二年といふ。歲^マ。當^マ。れり。和漢合運圖等の諸書^マ。葦^マ。不合^マ。尊^マ。の
 元年を。戊申とし。其十二年を。己未とし。共^マ。葦^マ。不合^マ。尊^マ。の
 御世と為^マ。とる。は誤^マ。あり。予^マ。今^マ。此説^マ。を。竹^マ。斯^マ。其^マ。壬辰、歲^マ。純
 書紀、年^マ。此^マ。古説^マ。不^マ。從^マ。て。合^マ。運^マ。せる^マ。也^マ。
 前、辛卯、歲^マ。を。邇々、藝^マ。命^マ。の。末年とある。彼、天降、元年、辛酉、ま^マ。了^マ。
 推^マ。上^マ。れ。一^マ。千^マ。五^マ。百^マ。三^マ。十^マ。一^マ。年^マ。あり。是^マ。邇々、藝^マ。命^マ。此^マ。御世^マ。を
 ろし、看^マ。せ。依^マ。年^マ。數^マ。あり。此^マ。固^マ。く。依^マ。初^マ。の。所^マ。為^マ。と。ハ云^マ。牙^マ。せ^マ。
 と。議^マ。する^マ。人^マ。此^マ。多^マ。う^マ。る^マ。べ^マ。く^マ。其^マ。誠^マ。を。尤^マ。ゆる^マ。事^マ。亦^マ。有^マ。ま^マ。と^マ。
 三^マ。御^マ。代^マ。の。年^マ。數^マ。純^マ。二^マ。千^マ。四^マ。百^マ。年^マ。取^マ。る^マ。由^マ。を。惟^マ。ひ。定^マ。ら^マ。む^マ。上^マ。り^マ。
 加^マ。の。大^マ。山^マ。祗^マ。神^マ。の。誓^マ。ひ。此^マ。由^マ。縁^マ。を。知^マ。得^マ。て。は。止^マ。事^マ。を。得^マ。ま^マ。か^マ。く^マ。
 と思^マ。ひ。定^マ。免^マ。依^マ。有^マ。依^マ。じ^マ。記^マ。謂^マ。ぬ^マ。る^マ。こ^マ。を。見^マ。む^マ。人^マ。い^マ。う^マ。と^マ。平^マ。心^マ

予想ひ旋らちて如此く。三御代此年歴を推量で記せれど。
此を御世と云ひ看せ依間の歳數はこそ有れ三柱共り。そ
此實の御齡を幾許に坐くおと云、こを絶て惟ひ寄り奉
依こ空能は然そ有れど。三柱共り。御子生坐せるは其御
齡の末れ依事を論ひれし。然るも邇々藝命。そ此天降坐せ
る時を決て。十歳を越給ふはじ此こ。古史傳小説明勢
依如れるを。も且くを注す。神典此文面亦て天降り
て。宮敷交給ふと。間もれく。御妻問あてし趣り見れど。此
をそ此間。記せる事此お記故。然は見ゆる形。若は去
を小文面此如く。天降坐せるを。間おく御子生坐むるは。

譬牙バ。當時三十はあり此御歳と爲らむも。千五百年餘
に此長を御世に間。御子彦火々出見命を共り經給ふ
上。父神の神騰に坐て後。お五百八十歳に御齡あれど。
總ては却りて。父尊よに御命長く。御坐せ依理あり。お彦
火々出見命に御子生し給す依も。神典の趣は。甚若く。
太子に坐し間の事。おと見れれど。此は三十歳計に此事
とせむ。其生はせる御子。暮不合命を。そ此御祖父。邇々藝
命を。六百歳計に。御齡長を。御父神の御世。共り經給ひ。
そが上。三百歳は。此御世の加はれむ。此をれく長を
御齡と成り。然て。次く。御命長く坐むるを。彼大

山祇神此誓ひの御歎^{ウケ}叶^カは^ナ故^{カレ}是^コをもて。邇々^ニ藝^ゲ命^ノ總々^ト
手見^テ命^ノの御子^{ミコ}生^マ坐^マせ^テ家^ノ事^ヲを共^トす^ル。其^レ御^ミ齡^ノの末^ノれ^ド也^{ナリ}。とハ
謂^イふ^ルあり。葦^{アシ}不^レ合^ハ命^ノ也^{ナリ}。御^ミ子^ノ生^マ給^ヒし^モ。晚^オう^レ也^{ナリ}。こ^ノ也^{ナリ}。準^ス牙^ヲ
て知^ル家^ノ也^{ナリ}。上^カヲ出^スせる師^シ説^クよ。倭^{ヤマト}姫^ノ命^ノ世^ノ記^ノを始^メて後^ノ世^ノ此^ノ
を論^ジして御^ミ世^ノの弥^ヤ益^キヲ長^ク久^クし^ム。心^ノ配^ハす^ル也^{ナリ}。由^リよ。祝^{イハ}奉^ルれる心^ノ也^{ナリ}。
ら^ビびあるべし。と^シ言^フき^テこれ^ト然^ルる心^ノ配^ハす^ル也^{ナリ}。非^レ交^ハす^ル也^{ナリ}。御^ミ子^ノ
生^マを若^カ如^ク程^ノの事^ヲ取^ルれ^テ家^ノ故^ヲ抑^メ此^ノ三^ノ御^ミ代^ノの天^{アメ}皇^ノ命^ノと^シち
次^ニく小^コ長^ク成^リも^ト来^ルき^ルあり。抑^メ此^ノ三^ノ御^ミ代^ノの天^{アメ}皇^ノ命^ノと^シち
此^ノ御^ミ齡^ノ此^ノ末^ノま^デ。夫^レ婦^ノ此^ノ道^ノの晚^オく坐^マち^ル事^ヲ由^リ也^{ナリ}。凡^ソ人^ノ此^ノ測^ス
也^{ナリ}。知^ルる^ル事^ヲ小^コは^レ非^レざ^レれ^ドも。神^{カミ}世^ノヲ神^{カミ}等^ト也^{ナリ}。御^ミ子^ノ生^マ給^ヒる^ル
事^ヲ蹟^ノヲ尋^メて。熟^{シク}替^ハふる^ル小^コ。皇^ミ産^ム靈^ノ大^ニ神^ノ二^ニ柱^ノの御^ミ間^ノヲ。御^ミ子^ノ多^ク
く生^マ給^ヒ牙^ヲ家^ノ事^ヲ也^{ナリ}。天^{アメ}地^ノの始^メを^レれ^シ。万^ツ此^ノ事^ヲ物^ヲな^リ。成^リし^テ給^ヒは

む^ヲ爲^ス。ま^ニ伊^イ邪^ヤ那^ナ岐^キ伊^イ邪^ヤ那^ナ美^メ二^ニ神^ノの御^ミ子^ノ多^ク生^マ給^ヒ牙^ヲ家^ノ事^ヲ也^{ナリ}。
素^{モト}と^リめ。人^{ヒト}種^ノヲ蕃^ハ息^スし^テ久^ク也^{ナリ}。其^レ人^ノ草^ノ小^コ。謂^イゆる^ル造^ク化^ノの御^ミ惠^ノ
哉^{ナリ}。賜^タは^レむ^ヲ爲^ス。そ^レ此^ノ神^ノ等^ヲを^レ生^マ給^ヒ牙^ヲ家^ノ事^ヲ也^{ナリ}。此^ノは^レ今^ノ論^ノ出^ス
る^ル交^ハ限^リ非^レ交^ハ。そ^レ二^ニ神^ノ相^ア誘^フひ^テ。國^ノ生^マ成^リさ^レむ^ト。夫^レ婦^ノノ事^ヲ
八^ハ百^ハ万^ハ之^ノ神^ノ哉^{ナリ}。生^マ坐^マし^テ然^ルして後^ノヲ。謂^イゆる^ル造^ク化^ノの神^ノ也^{ナリ}。此^ノは^レ今^ノ論^ノ出^ス
を^レ生^マ給^ヒし^テ事^ヲ此^ノ也^{ナリ}。其^レを^レ熟^{シク}味^ヒひ^テ知^ルり^テ辨^ベふ^ル也^{ナリ}。此^ノは^レ今^ノ論^ノ出^ス
國^ノ神^ノ小^コして。御^ミ子^ノ多^ク生^マ給^ヒ牙^ヲ家^ノ事^ヲ也^{ナリ}。須^ス佐^ノ之^ノ男^ノ命^ノ。大^ニ歲^ノ神^ノ。大^ニ國^ノ
主^ノ神^ノあり。其^レ趣^ヲ察^スふ^ル。其^レ子^ノ等^ヲを^レ皆^ク國^ノ造^ク也^ノ事^ヲ。よ^ク人^ノ草^ノ
を^レ養^フ育^ムみ^テ給^ヒふ^ル方^ヲ也^{ナリ}。使^シ以^テ給^ヒは^レむ^ヲ爲^ス。生^マ給^ヒ牙^ヲ家^ノ事^ヲ也^{ナリ}。其^レ須^ス
神^ノの御^ミ子^ノと^シち。大^ニ歲^ノ神^ノ此^ノ御^ミ子^ノ多^ク也^{ナリ}。皆^ク人^ノ草^ノを^レ養^フ育^ムみ^テ給^ヒふ^ル方^ヲ也^{ナリ}。其^レ須^ス
神^ノを^レ給^ヒひ^テ大^ニ國^ノ主^ノ神^ノの御^ミ子^ノ多^ク也^{ナリ}。皆^ク人^ノ草^ノを^レ養^フ育^ムみ^テ給^ヒふ^ル方^ヲ也^{ナリ}。其^レ須^ス
給^ヒ牙^ヲ也^{ナリ}。空^ノ有^ルも^ト悟^ルべ^シ。漫^ク女^ノ色^ヲを^レ好^ムみ^テ給^ヒ牙^ヲ家^ノ事^ヲ也^{ナリ}。其^レ須^ス

○弘仁歷運記考上

○二十一

小そ非ぎ 斯て天神あちれ上を思ふ。皇産靈神を除ては。其御子。天底立神。亦名角疑魂命はのり。御子多く生坐る神を有らば然る小其御子神等みふ皇美麻命小副て降り給牙る哉思ふ。是よと天下を治給ふ方小使はし給給をむ爲あり。其古史第四十九段よと第百三十七段の傳ふどを見て知べし。よと天照大御神の太子忍穗耳命は王依毘賣命に御合はして御子二柱を生給牙る。其一柱を皇孫邇々藝命よと此を天下の大皇少して天降し給ひ。是より前牙生給牙依一柱を天火明命小坐次を此神をも大和國へ降し置て。後牙神武天皇は彼國を征入る乃ふ時牙内を起りて皇軍を助け奉らし

免給牙。天火明命を即饒速日命牙て物部氏の遠祖神今此等此事等を思ひ。うが天津神とちれ色好み給牙る事實の殊牙所見ある事れを等々を想ひ合次る小此三御代の然依御齡は末ふ夫婦乃道のおはし坐せ依を天神之御子小坐せむ。惟神牙世情遠く。玄家牙謂ゆる守真は道自然牙備牙坐して御世間の末まで其事は有さざし。已よ大皇統を令嗣給ふるき御子生し給はては有はるき時を神慮末あて。如此晚く御子生給牙る小や。空推量に奉りぬ。但し已婚次とちては其美を感て醜をたらし給牙るに惟神は御情小て此を神に人も同じ趣れり。然る小て兄弟あらをて使給はるはうば大山神の誓ひ此験は無らまし物をと思牙ど當昔加れら交如此あて行登き淡ま道理の具は

事をヒトヨミテ一宿爲婚オホムヨコと有オホムヨコ。御世情オホムヨコのハシしとフカ深フカうらぬ故オホムヨコと聞オホムヨコえ。後オホムヨコ尔雄畧オホムヨコ天皇オホムヨコ此童女オホムヨコ君オホムヨコをヒトヨ一宵ヒトヨ小ヒトヨ七ヒトヨ回ヒトヨ終ヒトヨしてハ娠ハはしハ免ハ給ハ牙ハ依ハをハハ。事ハの趣ハ替ハりてハ聞ハゆるハ成ハもハ思ハひハ合ハせてハ悟ハるハ。

ハるハ。人ハ、世ハとありてハもハ人ハをハあハ命ハ長ハ交ハ々ハ故ハりハ十ハ七ハハハオハ計ハりハ小ハもハ至ハらハどハハハ子ハはハ生ハしハ得ハぬハ命ハ長ハ交ハ々ハ故ハりハ十ハ七ハハハオハをハ思ハふハ。命ハ短ハ交ハ物ハ木ハどハ此ハ道ハのハ速ハはハしハくハ難ハ犬ハあハどハ此ハ其ハ生ハれハ。依ハ年ハのハ内ハ。子ハをハ成ハをハ類ハをハ更ハありハ。蚕ハあハどハはハ蝶ハをハ化ハりハてハ。巢ハよりハ出ハるハをハ直ハ子ハ成ハ生ハれハ。あハどハはハ成ハ爲ハしてハ子ハをハ成ハをハ牙ハてハ。忽ハちハ死ハぬハ依ハれハどハ。壽ハ長ハきハ人ハのハ上ハよりハ見ハてハ。

ハはハ。最ハはハうハ取ハるハ思ハはハるハ。等ハをハもハ思ハふハ。

三
 但ハ葺ハ不ハ合ハ尊ハ之ハ太子ハ。神倭ハ磐ハ余ハ彦ハ天皇ハ。年ハ十五ハ爲ハ太子ハ。四十ハ五ハ歲ハ甲寅ハ。從ハ筑紫ハ日向ハ宮ハ。船軍ハ東ハ征ハ。至ハ庚申ハ年ハ。平定ハ中國ハ。辛ハ酉ハ年ハ正月ハ。即ハ天皇ハ位ハ。是ハ爲ハ元年ハ。總計ハ從ハ天皇ハ元年ハ辛酉ハ。至ハ今ハ上ハ。弘仁ハ二年ハ辛卯ハ。合ハ一千四百七十一年ハ也。

西年正月。即天皇位。是爲元年。總計從天皇元年辛酉。至今上弘仁二年辛卯。合一千四百七十一年也。

神倭磐余彦天皇御年十五。小して太子をあり給ひ。四十五小あり給牙依。甲寅歲。日向宮發坐して。庚申歲まで。中國を平定免給ひ。辛酉年。皇位。即坐せ依。元年。爲。次と有る。即御紀と同じ趣。依。紀。尔。其。甲寅年。此。末。是。年。也。太歲甲寅。有。あり。此。太歲。云。ふ。赤縣漢世以來。此諸書。小。謂。ゆる。太歲。と。ハ。異。れ。也。赤縣。籍。不。太歲。と。云。依。事。と。り。あ。る。甚。く。誤。れ。る。説。あり。其。を。太。其。を。む。の。し。我。が。相。識。吳古曆傳。了。委。く。論。牙。る。哉。見。る。を。し。其。を。む。の。し。我。が。相。識。れ。る。細井貞雄。が。説。了。天皇命。此。御世。知。看。せ。依。初。免。也。天地

○弘仁歷運記考上
 ○二十三

純諸神モロガミ之ヲちふ。御饗奉アヘタマヒツる。大嘗祭オホニヘツリといひ。此御祀ミツリありし年。伐御世ミツノミに始ハジまりて。太歳オホトシと云ふ。これ元年オホトシを數カヅり出デは始ハジり。其コノを太歳オホトシとしも稱イふを御世ミツノミありし看ミて始ハジりて。御田ミツノ寄ヨシを元オホトシと數カヅりて。所聞ミコト食ケし始ハジりて。神等カミナリも奉タマへ給タマふ年オホトシなり。此コノを元オホトシと數カヅりて。次ツギくは許ヨク多シ此御年ミツノミを經ス積ツミみ給タマふ。然シカらば。神カミ武天皇タケノミコ紀キる。辛酉ツルギ年オホトシ春ハル正月オホトシ庚辰ツルギ朔ツキ。天皇タケノミコ即ツキ帝位ミカドノイシ於ニ橿原宮ツルギノミヤ。是コノ歳オホトシ爲ス天皇タケノミコ元年オホトシを記シして。是コノ年オホトシ也ナリ。太歳オホトシ辛酉ツルギと無ク。是コノ前サキ甲寅ツルギ年オホトシ此コノ所コト也ナリ。是コノ年オホトシ也ナリ。太歳オホトシ甲寅ツルギと有リ。如何イカニ云フ。小コ此コノ古事記傳コトワザノツト十八卷オホトシ初條ハジメノツギ。五瀨命イツセノミコは葦アシ不合命フキアヘノミコの第一ハジメ。此御子ミツノミコ坐マせ。父命ウチノミコ崩ク坐マせり。此命コノミコぞ。天津日嗣アマツヒノツギを所シヨ知シ看ミこりけむ。書紀ツキ小コ此御兄弟ミツノミコノイマ此御兄弟ミツノミコノイマ五瀨命イツセノミコを何ナニ傳ツトふも皆みな第一ハジメあり。れど此五瀨命イツセノミコを何ナニ傳ツトふも皆みな第一ハジメあり。

然シカまは磐余彦命イハレヒコノミコも。此時コノトキ稻冰命イナヒメノミコ御毛沼命ミケノミコを共トり。此五瀨命イツセノミコ奉仕ツカヘて坐マむを。五瀨命イツセノミコは未中州イミナカノツクニを言向コトムケ終賜オホトシは。早ハヤく崩ク坐マて。御業ミツノミコノイマ伐終賜オホトシは。磐余彦命イハレヒコノミコそは御業ミツノミコノイマを成終ナシマて。遂ツヒて天下ツクニ伐知ミコト看ミける故ユ。彼命コノミコを主ヌシとし。五瀨命イツセノミコを客カク小コ爲スして。次ツギは云フ。はあ。を説ツトれ。は如イカニあまむ。太歳オホトシ甲寅ツルギと有リ。彦五瀨命ヒコイツセノミコ。大嘗祭オホニヘツリありし元年オホトシれり。斯カクて神武天皇カムヤマトノミコそは御心ミツノミコノイマを紹給ツギタマひて。功竟コトヲヘ給タマひ。後ノチ大嘗祭オホニヘツリを爲ス給タマふ。年伐指トシして。天皇タケノミコ元年オホトシをハ書カせ給タマふ。命ミコの太歳オホトシと。天皇タケノミコ此太歳オホトシと。太歳オホトシをふこを二ニ所トコロ有リしを。書紀ツキ小コ撰ツクび取ツク給タマふ時トキ始ハジりて。太歳オホトシの伐キ其コノ隨ツグふに。後ノチ見ミえし。太歳オホトシを改カめ給タマふ。れど。猶ナカ舊コトを。後ノチ天皇タケノミコ元年オホトシを断ツグり給タマふ。是コノ所トコロまては。彦五瀨命ヒコイツセノミコ此太歳オホトシと。

り。數牙云る例はし此殘れる哉。即其。そは綏靖天皇紀元。元
年春正月壬申朔己卯。神渟名川耳尊。即天皇位。是年也太歲
庚辰。安寧天皇紀元。元年七月癸亥朔乙丑。皇太子即天皇位。
是年也太歲癸丑。懿德天皇紀元。元年春二月己酉朔壬子。皇
太子即天皇位。是年也太歲辛卯。次く亦見えさゆ。故是
太歲を一年と數牙て。次々ふ。二年三年を數牙て。崩坐を
て。幾十年をうぞる言ふぞ。上古此定れり。依云るは。
信り然る言ふて。日本紀も。持統天皇小至依まで。即位此年
の末亦。必考。是年也太歲某。と記されど。然る。續日本紀
何所小も。此事を記されざる。前紀の文例を遺られし物
うと思ふ。然る。非。交。去。太歲と云ふ小代る。年號とい

ふ事此出來し故此事れる。○上り出せる。細井貞雄が
説。世在。在。神曆考と。少く草稿し。始る物此
中。小見えし。抄。但し此例。違る。如く思。所小有
し。出。依あり。綏靖天皇紀の。即位元年此前年。于時也太歲己卯。を
有依と。神功皇后紀。是年也太歲辛巳。即爲攝政元年。と有
る耳あり。然れども。此を熟思ふ。神功皇后は。應神天皇幼
く坐し故。此年とて攝政し給ひ。大嘗祭を行ひ給ひし。う
ば。太歲と云ひ。綏靖天皇即位元年此前年。取るは。其庶兄手
研耳命。そ此御弟。ち伐害ひて。皇位を得むを構牙て。私小
大嘗祭を爲られし故。然る有依あり。即そ此所此文。手
歴朝機。故亦委事。而親之。然其王。遂以諒闇之際。盛福自由。苞
藏禍心。圖害二弟。于時也太歲己卯。と見え。下。獨卧于大

庚申歲^ニ崩御^シ事^トある。此^レ神武天皇^ニ中國^ヲ平定^ス實^ニ然^ラむも知^ラる^ラら^ズ。此^レ神武天皇^ニ中國^ヲ平定^ス畢^シ坐^シ依^ル年^ニ此^レ庚申^トま^シ大嘗^ヒた^ル去^リ看^メせ^ル依^ル年^ニ此^レ辛酉^ト形^ルる^ガ。二千四百年^前此^レ高天原^トより葦原^中國^ヲ平^ム竟^マせ^ル依^ル年^ニ此^レ庚申^トは^シ天祖^ニ大嘗^ヒ所^ニ聞^ク看^メせ^ル依^ル年^ノ辛酉^ト此^レ也^ト。期^ニら^ズも相^ツ符^フ牙^ヲ。於^テ是^ニは^シ神武天皇^ニ甲寅^年小^シ筑紫^ト御^ミ軍^ヲを起^シ給^ヒて。其^レ七年^中云^フ庚申^年。功^ト竟^ハ給^ヒし^ヲ。以^テ推^シ量^レれ^ド。天照大御神^ニ此^レ御命^トも^シ。豐葦原^中國^ヲを平^ム始^メ給^ヒし^ト。甲寅^年小^シ。其^レより七年^を經^テ。庚申^年此^レ事^ト竟^ル坐^ル乃^チむを想^ヒ度^ラら^ズ。其^レ既^ニ前^ニ條^ニ注^ス文^ヲ云^フ依^ル如^ク。此^レ天^皇氏^伊邪^那岐^大神^ニ此^レ元^年形^ルる^ガ。其^レより一^万八^千歲^後の甲寅^年。天照大御神^ニ高天原^須佐^之男^神此^レ天^下を御

言^ハ依^リ給^ヒる^年小^シ當^マ。其^レよ^リ三^千三^百歲^後此^レ甲寅^年。大^國主^神の元^年形^ルる^ガ。高天原^トより大國主^神。言^ハ問^ヒて^シ此^レ給^ヒし^年其^レ大神^ニ此^レ千^六百^八十^一年^此あり^ト。甲寅^年此^レ其^レより七^年あり^ト。庚申^年。平^竟給^ヒし^ト。所^ニ想^ヒる^レ此^レは^シ。其^レ彼^レ也^ト。此^レを想^ヒ。去^リを以^テ彼^レを惟^テ牙^ヲ。互^ニ事^ト此^レ證^ス也^ト。此^レ也^ト。遙^ク合^フ符^フ。奇^ニ異^ト。此^レと云^フも。中^ニ此^レ也^ト。然^レれ^ド。日^本紀^ニ年^干支^此と^シ。小^緑。此^レ古^説ある^事を熟^シ思^ヒて^シ。其^レ予^ハ負^キ氣^ヲ形^キ議^論。此^レは^シ。企^テ此^レ事^ト。其^レ其^レ己^ノ別^ニ。予^ハ著^セる^天朝^無窮^曆と^シ。此^レは^シ。本^文。神武天皇^ニ此^レ元^年。辛酉^{より}。嵯峨天皇^ニ。弘仁二年^{辛卯}。此^レ至^ル依^ル年^數。實^ニ小^シも撰^ル者^ニ。此^レ摠^計せ^ル依^ル如^ク。一千四百七十一年^形。此^レ歷^運記^ニ此^レ成^ル。辛卯^{あり}。此^レ慮^ラ。此^レを考^メ見^バ。や^と思^ヒ起^シ。此^レ物^ヲ。今^上。此^レ天保二年^も。辛卯^{あり}。是^レも奇^ニ寓^スと^シ。謂^フ。と^シ。云^フ。

其、天皇元年辛酉ハハ準計漢地年代ニ當周僖王三年辛酉ニ。周代
王八百十八年自武王元年戊寅至僖王二年庚申凡十六
王四百六十三年自僖王三年辛酉至赧王滅年凡二十五
十年。然則自僖王三年以降歷九代百五王一千四百七十
一年也。

上、件二節も本朝の舊説をもて年歴を推考之と依説れるが。
是より下三節も和漢字合運して推考考之と説ふ也。○其
天皇と云。神武天皇を申せり。周僖王をば彼武王と云。第十
六代亦立と依王不て諸書亦まと釐王と云書と也。此王は
在治也。竹書紀年亦攷ふ依り。庚子より甲辰まで僅り五年
にして殂せれど辛酉を無く其三年壬寅亦當れ也。然依

り其三年を辛酉とし神武天皇元年亦當依と云こ也。此
記のみ非下引く三善清行朝臣此勘文亦も神倭磐
余彦天皇辛酉春正月即位是為元年當於周釐王三年と云
ひ帝王編年記愚管抄亦も神武天皇元年辛酉當周世
第十六代僖王三年也。亦有れど此を誤あり。宋史外國七皇
る所。雍熙元年日本國僧裔然與其徒五六人浮海而至獻
本國職員令王年代紀各一卷其年代紀所記云とて擧る
文中亦神武天皇即位元年甲寅當周僖王時。此、僖王は
也。亦も見えと也。是も同じ類此誤説あり。此、僖王は
次。惠王を云ふ愚管抄此一説り。以周惠王十七年辛酉當
之。此説為吉當時無相違之故也。亦云ひ神皇正統紀和漢合
運圖亦も此十七年辛酉城當と依を正し也。然れど注

文也。僖王二年と有。伐也。惠王十六年と改。僖王三年と有
依を也。惠王十七年。や改。未だ見依。元年を戊寅と云ひ。
ま。其代數年數。如と云。依説も誤。有れど。此を既。○自
命。歷序考。夏殷周年表。如と云。論。牙れど。此は漏。○自
僖王三年以降。歷九代とハ。嵯峨天皇。此御世。彼國の唐。憲
宗。云。し。時。當れ也。周。世。と。秦漢魏晉宋齊梁陳隋唐
と。十代。至れり。然。九代。云。依を誤。れり。百五王。は。
周。僖王。と。り。唐。憲宗。至。依。王者。此。員。如。る。是。は。と。相違。あ
り。然。れ。と。也。此。後。此。事。を。今。此。考。一。千。四。百。七。十。一。年。是。
前。條。此。年。數。同。く。周。惠王十七年辛酉。即。神武天皇元年と
り。弘仁二年辛卯。即。唐。憲宗。元。和。六。年。至。依。年。數。あり。此。

數。此。加。く。打。符。ふ。を。以。て。と。神武天皇元年。此。周。僖。王。は。上。件
王。三。年。小。當。依。と。云。ふ。説。此。誤。如。る。こ。を。張。明。け。し。上。件
件。論。了。る。庚申。歲。を。辛酉。歲。と。變。神。武。御。世。よ。り。去。り。大。如。る
事。故。あ。り。年。次。如。る。小。就。て。按。ふ。元。正。天。皇。紀。養。老。五。辛
酉。年。二。月。甲。午。日。此。所。に。詔。曰。世。諺。云。歲。在。申。年。常。有。事。故。此
如。所。言。去。庚。申。年。各。徵。屢。見。水。旱。竝。臻。平。民。流。沒。秋。稼。不。登。國
家。騷。然。万。姓。苦。勞。遂。則。朝。廷。儀。表。藤。原。朝。臣。奄。然。薨。逝。朕。心。哀
慟。去。庚。申。年。を。也。即。養。老。四。年。あり。此。年。此。八。月。癸。未。日。此。所
之。廢。朝。舉。哀。内。寢。云。今。亦。去。年。災。異。之。餘。延。及。今。歲。亦。猶。風。雲
氣。色。有。違。于。常。朕。心。恐。懼。日。夜。不。休。然。聞。之。舊。典。王。者。政。令。不
便。事。則。天。地。譴。責。以。示。各。徵。或。有。不。善。則。致。之。異。云。く。故。有。政

令不便事悉陳無諱直言盡意無有所隱朕將親覽於是公卿等奉詔退各仰屬司令言意見とあり。あ本委くは御紀う就事實を見ても抑お此歳在申年常有事故と云牙依諺を皇國知るを古し。抑お此歳在申年常有事故と云牙依諺を皇國おいや古の云い來し事なる故り世諺云やハ詔牙り其を上件に如く大國主神に國避て坐せ依年まの神武天皇の中國を平治ませる年の庚申れでしら奇異符ひて謂ゆ依革命とも申次るき事故ありし故を以てかく言次ぎ來れる哉此御世頃を詠りて凶事あ依年におせ云々む故の故よは非交そは此事本とる庚申年高天原より御國

を平給ひしハ更あり神武天皇の中國を平給ひしも吉事あれど此吉事の方より云む小を吉年此極みと云ふ然は有れど然る詠りて此諺やこれ年頃の凶事をたおし合せはして如此も詠り出さる大詔命れいをも畏た尊交聖慮れることを深く心を扱是をり百八十年のち醍醐天皇は昌泰三庚申年小三善清行朝臣に奏進せる革命革令の議書といふ物あり此革命曆部類を辛酉改元此時ごを此文書どに哉集記せる書尔出る也此革命部類といふ書臣此奏狀三通と菅家よ奉れる狀と四通を善家集より出せる由を記し次を建久此度の諸文書四卷を弘長此度の諸文書三卷を元亨の度此諸文書四卷を永徳の度の諸文書五卷は嘉吉此度の諸文書なるが延喜以來此勤文事例と此五卷中尔是はれり今其を略文して出さ本此表題尔を革命勸文と有也今其を略文して出さむ小發端尔預論革命議を題して臣清行言天道玄遠聖人

所以罕言曆數幽微。緯候以之為誕。由是學之者若迂遠傳之者似憑虛。臣竊依易說而按之。明年二月當帝王革命之期。君臣剋賊之運。凡厥四六二六之數。七元三變之候。推之漢國。則上自黃帝而下。至李唐曾無毫釐之失。考之本朝。則上自神武天皇而下。至天智天皇亦無分餘之違。然則明年事變。豈不用意乎。伏惟陛下誠雖守文之聖主。既當草創之期數。故即位之初。遇朔且冬至之慶。改元之後。頻呈壽星見極之祥。日本紀略云。昌泰元年十一月一日丙申朔且冬至。諸卿上賀表。不見元。同三年十二月十二日。老人星見。云扶桑略記云。昌泰三年。代末。是歲老人星見。武藏國。云。天數改運。既彰於視聽之間。何遑假說於占候之術。但變革之際。必用于戈蕩定之中。非無

誅斬。何者。帝王革命。此周易革卦之變也。按革卦離下兌上也。離為火。兌為金。金雖有從革之性。非得火則不變。故金火合體。上下相害。戕蕩之理已窮。周易革卦此理を説くを盡せるがを以て論ずるをたは其説ハ次然るを離を火を以て依え古易も同じくこれ兌を辰巳此卦也。澤小こそ有れ。金も非也。然る小此を金を次る也。周文が私意をもて西の配せ依り起れる事なり。然れを離を兌と相剋する理あるを澤小と水小と離火と相射る。伏望聖鑒豫廻神慮。仁恩塞道。理れり。と云ふ云々。其雅計矜莊。其異圖青眼於近侍。推赤心於群雄。則封豕之徒。自然革面。食堪之美。終成好音。撒亂之時。垂其衣裳。即戎之運。鳴其環珮。豈不美乎。臣機祥難辨。靈圖易迷。獻其丹款。雖望飲於白虎之槽。驗其玉英。恐肩責於黃龍之瑞。清行誠恐誠

惶頓首謹言。書紀。末小昌泰三年十一月廿一日。從五位上行文章博士。兼伊勢權介。三善朝臣清行。其記は。ほこ此時。別り管丞相より呈せる諫書。清行頓首謹言。交淺言深者。妄也。居今語來者。誕也。妄誕之責。誠所甘心。伏冀尊閣殊降寬容。清行昔者遊學之次。偷習術數。天道革命之運。君臣剋賊之期。緯候之家。創論於前。開元之經。詳說於下。推其年紀。猶如指掌。斯乃尊閣所照。愚儒何言。緯候之家。年此勘奏。出せる。易緯詩緯。ふと此説を云ひ。開元之經。ハ。唐此王肇。開元曆紀。經。と云。書此事。形り。其を下。ふも云ふ。を見て。知る。し。但離朱之明。不能視睫上之塵。仲尼之智。不能知篋中之物。聊以管見。伏添橐籥。伏見明年辛酉。運當變革。二月建卯。將動干戈。遭凶衡禍。雖未知誰是。引弩射市。亦當中薄命。天數幽微。縱

難推察。人間云。爲誠足知亮。伏惟尊閣挺自翰林。超昇槐位。朝之寵榮。道之光華。吉備公外。無復與美。伏冀知其止足。察其榮分。擅風情於烟霞。藏山智於丘壑。後生仰視。亦不美乎。努力努力。勿忽鄙言。清行頓首謹言。書れ。ゆ。末。昌泰三年十月十一日。文章博士。三善朝臣清行。謹上。管右相府。殿下政所。とあり。本書。抑。其。朝。誤字。あれ。む。本朝。文粹。形る。を。按。正。して。引。り。抑。其。朝。臣。此。管。公。右。の。諫。書。被。奉。ら。れ。し。事。を。管。家。曆。傳。小。文。章。博。士。三。善。清。行。奉。書。於。管。公。諫。致。仕。此。管。公。爲。右。相。事。幼。主。並。姦。佞。臣。察。有。毀。言。之。難。託。災。星。言。之。也。と云。依。多。實。然。依。事。形る。が。猶。別。り。謂。あり。其。を。此。布。と。寬。平。法。皇。と。昌。泰。帝。を。御。父。子。此。間。り。御。快。ら。ぬ。故。あり。て。法。皇。密。り。帝。を。廢。し。奉。ら。む。此。

御心あり。菅公も。數そ此事を議す。誘ひ給ふ。兼引奉らば。法皇も。其事に布し止らば。然れど。此は天皇も。顯はし。白さむ事此畏れ。菅公みおら。身退らむ。及こや無し。所思し決ま。四度まで上表して。其職を辭し給ふ。天皇は。然る故。所不知。看し給ふ。許し給はば。朕卿を見。依こや父均し。やさ。勅。大御言。畏く。忝。又辭し。白し。あ。御身此難。願ひ給はば。漸々。法皇此御心をも。取直し奉らむ。と爲。御坐らむ。此。法皇此御間。快。法皇此依。御企あり。菅公を誘ひ給ふ。事。形。皆。此。證。有。既。委。王。神。等。を。拜。此。大。要。を。此。み。云。ふ。ね。り。茲。は。彼。清。行。朝。臣。也。

元とめ菅公を睦み。其下風。從。人。此。法。皇。も。然。る。御。企。あり。て。菅。公。被。誘。ひ。給。ふ。事。を。疾。察。す。此。事。他。漏。れ。ぬ。日。頃。菅。公。を。妬。み。惡。言。徒。ら。讒。を。構。す。其。難。此。菅。公。歸。せ。む。事。を。危。殆。み。は。天子。も。然。る。衆。口。此。發。ら。む。時。を。深。く。慮。を。廻。ら。し。給。ふ。如。く。諫。奏。し。む。と。欲。ふ。り。法。皇。此。御。事。も。有。れ。ど。是。は。顯。露。し。白。し。難。く。茲。一。時。の。權。策。を。按。じ。出。して。神。武。天。皇。即。位。元。年。此。辛。酉。年。と。世。小。庚。申。年。辛。酉。年。は。事。故。ある。年。あり。を。謂。ひ。子。年。被。も。凶。年。此。言。次。來。れる。諺。の。有。依。を。其。權。策。の。本。據。と。知。し。年。申。を。事。故。ある。年。也。云。ふ。諺。を。元。正。天。皇。紀。此。詔。書。小。見。え。て。既。り。上。り。引。さ。り。子。年。此。諺。は。元。明。天。皇。紀。の。詔。曰。よ。朕。聞。

弘仁歷運記考上

舊者相傳云子年者穀實不宜而天地垂祐今茲大總古賢王
有言祥瑞之美無以加豐年云々宜乎革曆部類の例文此
波天不靜須止從古傳來札利因茲天慎美御座須聞仁種
種仁其徵在利云々と宣する易此革卦の義をせり合せて
文の正此等を見て知るし
革命の大變まの革令革運ふどの事を古記易緯此説不託
し此方此故實彼方此古説うち符と依趣して天皇其事
と相く明年小事あはるべき由を知らせ奉り菅公も其職
哉ご小退交給はゞ事小坐給ふはじと思慮りて作出され
ある勘奏諫書小ぞ有々依其を彼勘奏此文の伏望と云々
り豈不美乎云はゞ六十九字殊り切迫る今や事起依
機を見交は書出未じ記文相る哉以ても知るし然依小菅

公上件此謂り依りて其諫を用ひ給ふこと能は交黙止給
牙依間小果して其事もれ聞えて時平公を更あり菅公哉
嫌ふ人々種々小謀おち上皇此御企をハ云牙ど菅公そ此
謀主と依如く讒せし故左遷の事小坐せ給り然れども
部類中此文どと小清行朝臣學通百家譽被万代勘奏之旨
仰以可信云々はと彼朝臣躬奉聖廟之訓説而告聖廟之咎
徵符應指掌殆似通神云々ふと所見とれと此を厭まて當
時此事跡を知りて其事跡を匿中小覆せて皇朝此事實西
土の候説を表り立て射多し故り殆神小通せし如く當
れる候と實を其候説の神相る小非交信義此神り入れ
るぞ有はて此昌泰四年此二月清行朝臣再加此革命革令
此證文を出して改元あらむ事を請はれと依文あり此を
善家集小出ある由ありて革曆部類此初卷小擧り此後

小革命革令此改元を云ふ事の祖説あれど今其略文を出して論はむ小請改元應天道之状と表題し。今年當大變革命年事を書出して易緯云辛酉爲革命甲子爲革令鄭玄曰天道不遠三五而反六甲爲一元四六二六交相乘七元有三變三七相乘二十一元爲一部合千三百二十年易緯云といふ文を易緯此文非五經曆算と云ふ妄書小易説を引くる文如し然て鄭玄曰と其辛酉云云茂鄭玄此加く注せる由あはるれど其易説と云ふ鄭玄以前ありき書されば此人の注あるを謂ふ抑易緯を十卷ありて悉鄭玄此注ある中其法此古義を此乾鑿度小略見えて鄭玄厭まで知れる事なる小此文り天道不遠三五而反六甲爲一元と云ふこと三五十五年小して天道本小反り六十年を百二十年を一部を爲すと云ふ事を古義り叶ハズ流る二十一元千三

四六二六云く取と云るも悉妄誕あり鄭玄いふで斯此如妄説を爲さむや然れど此を謂ゆる五經曆算此作者が自妄説して易緯と鄭玄と小誣託せ依説あること疑あし鄭法の眞義を予が太界古曆傳り委く著せぬるを知る爲し詩緯云十周參聚氣生神明戊午革運辛酉革命甲子革令注云天道三十六歲而一周也十周名曰王命大節丁冬一夏凡三百六十歲一畢無有餘節三推終則復始三期會聚乃生神明神明乃聖人改世者也此詩緯云まよ注云の説あれ亦信られ其を寛平此見在書目錄異説家の部小詩緯十卷魏博士宋均注と有れど此頃まよハ存おらぬと其後絶て世り傳はらば赤縣小を殊り登く亡とる書あるが其佚文を集記せる古微書外ど小も此説見えはるし當時この語有正し亦も有れ本文注を母小古義り合ハズまよ上り出せる易緯を合ざる説を元とり大れも取る小足ら空は下文の周文王と云よ入商郊を云まよを皆かしこ此説よをゆて云へる亦其謂白る年歴及び事實も相違の事等ありて證と形は不足

るこを命歴序考ま前漢
歷志辨を見り知るべし。周文王戊午年。決虞芮訟。辛酉年。
青龍銜圖出河。甲子年。赤雀銜丹書。而聖武伐紂。戊午日。軍渡
孟津。辛酉日。作泰誓。甲子日。入商郊。謹按。易緯。以辛酉為部首。然而
本朝自神武天皇以來。皆以辛酉為一部大變之首。此事在口
口未出之前。天道口口自然符契。然則雖有兩說。猶可從易緯
也。又詩。以十周三百六十年為大變。易。今依緯說。勘合倭漢舊
以四六為大變。二說雖異。年數亦同。記神倭磐余彥。天皇從筑紫日向宮。親帥船師東征。誅滅諸賊。
初營帝宅於畝火山東南地。橿原宮。辛酉春正月即位。是為元
年。當於周釐王三年。齊桓公始霸。主會諸侯於野。事見史記表。四年甲子春二月。詔曰。諸虜
已平。海內無事。可以郊祀。即立靈時於鳥見山中。是年周惠王
桓公帥諸侯伐蔡。蔡潰。遂伐楚。至召陵。謹按日本紀。神武天皇
責苞茅。此即桓公兵車第一之會也。

此本朝人皇之首也。然則此辛酉可為一部革命之首。又本朝
立時。下詔之初。在同天皇四年甲子之年。宜為革命之證文也。
史記して。其謂由る。四六二六數此變事の證とて。皇典と漢
史と小出之依。辛酉年。甲子年。此事實を次く小拾ひ擧らま。
二六を八辛酉小ゆれ。甲子小まれ。二復ふ。二六百二十年
なる哉。云ひ。四六をは。此も甲子小まれ。辛酉小ゆれ。四復ふ
て。四六二六。四十年なる哉。云ふ。然る小ま。甲子小ゆ。辛
酉小ゆ。只一復六十十年をも。二六と云ひ。ゆ。辛酉小ま。辛
甲子小ま。れ。三復八十十年。復六十十年。復八十十年。復六十十年。
胡乱し。死故。後此博士。之。種々論。子。説。等。和。不。引。然。き
ど。此。を。誣。説。小。取。る。小。足。さ。依。こ。を。上。小。其。本。據。と。引。れ。こ
る。緯。候。此。説。の。妄。か。依。上。を。況。て。其。未。説。あ。れ。バ。云。も。更。あ。り
其。最。末。小。推。古。天。皇。九。年。辛。酉。春。二。月。聖。德。太。子。初。造。宮。於。斑
鳩。村。事。無。大。小。皆。決。太。子。是。年。有。下。伐。新。羅。救。任。那。之。事。十。二。年

甲子春正月。始賜冠位。各有差。有德仁義禮智信大小合十二階。夏四月。皇太子肇制憲法十七條。是年隋文帝崩。然則本朝制冠位法令始於推古天皇甲子之年。豈非甲子革命之驗乎。已上一節。自神倭磐余彥天皇即位辛酉年。至于天豐財重日足姬天皇六年庚申。合千三百二十年已畢。記之。天豐財重日足姬天皇天豐財重日足姬天皇。天豐財重日足姬天皇。天豐財重日足姬天皇。皇六年庚申。合千三百二十年已畢。記之。天豐財重日足姬天皇。天豐財重日足姬天皇。天豐財重日足姬天皇。皇の大御名也。六年。本小七。其次小。後之一節之首。空題して。天智天皇者。息長足日廣額天皇之太子也。讓位於母。天豐財重日足姬天皇及舅天萬豐日天皇十一年間。猶為太子攝萬機。息長足日廣額天皇。天豐財重日足姬天皇。天豐財重日足姬天皇。天豐財重日足姬天皇。讓位。云。此。前後。緯。候。牽。當。さ。る。説。を。み。あ。非。あ。り。爰。與。中。

臣鎌子連誅賊臣蕪我入鹿。并父蝦夷伐新羅。救百濟。存高麗。服肅慎。天豐財重日足姬天皇七年辛酉。秋七月崩。天智天皇即位。當大唐高宗龍朔元年。三年甲子春二月。詔換冠位階。更為二十六階。織縫紫。各有大小。錦山乙亦有大小。大小中有上中下。是為二十六階。其大氏上者。賜大刀。小氏上者。賜小刀。伴造等氏上者。賜于楯弓矢。亦定民部家部。夏五月。大唐領百濟將軍劉仁願。使朝散大夫郭務宗等來進表。並獻物。當於大唐高宗麟德元年。已上革命革令之徵。倭漢毫詳不更具載。今年辛酉。謹按自天智天皇即位辛酉之年。至去年庚申。合二百四十年。此所謂四六相乘之數已畢。今年辛酉。當於大變革命之年也。又天智天皇以來。

二百四十年之内。小變六申。凡三度也云々。此云くを約と
る。天智天皇即
位辛酉年より昌泰三年まで二百四十年間形る。辛酉甲子
形ど此年小有てし事故を擧て小變此證を為られり。要
あは事小も非ざれ。伏望因循三五之運。咸會四六之變。遠履
は抄し出づるあり。大祖神武之遺蹤。近襲中宗天智之基業。當創此更始。期彼中
興。建元號於鳳曆。施作解於雷聲。臣清行誠恐誠惶頓首謹言。
と書れ多也。末小昌泰四年二月廿二日。從五位上行文章
博士兼伊勢權介三善朝臣清行上。をあり。是
時朝廷亦多清行朝臣。此前年奏進れる議書。此既多諦し。此
驗ありし。小驚。たはし坐せ。時博士等と異議。字謂ふ
人更す無く。即是議を用ひ給す。其多革曆部類。此延喜元
年例と云る所。小昌泰四年辛酉七月十五日甲子有改元事。延為

喜元 詔文云。去年之秋。老人垂壽昌之輝。今年之曆。辛酉呈革
命之符。云々。八月廿九日戊申。被發遣諸社奉幣使。伊勢石清
尾平野春日。大原野住吉。宣命被申。依逆臣竝。辛酉革命。老人星事。改御代
之號。為延喜元年之由。をあり。清行朝臣。此を形を面目を
ぞ云。及云。然。は有れど。前年此勸奏を元。これ一時の權策。小
及び改元。此狀を無。有。ば。や。を。思。牙。ど。此。を。加。の。勸。奏。の。を。
く。當。れ。る。小。其。候。説。此。本。據。い。の。小。を。問。牙。る。人。く。も。有。る。く。
は。右。證。文。此。勸。奏。を。作。ら。れ。て。正。す。む。然。れ。ど。こ。そ。其。言。ふ。所。み
形。牽。強。証。會。此。説。を。上。の。色。下。の。も。因。り。る。處。小。往。く。論。ふ。を
見。て。知。は。て。是。を。後。を。村。上。天。皇。此。御。世。り。天。德。五。辛。酉。年
を。應。和。元。年。を。改。免。ま。さ。此。御。世。を。始。免。て。謂。ゆる。甲。子。革

令小も改元あり。即應和四甲子年を康保元年を爲されり。即部類。天德五辛酉年二月十六日庚辰左大臣以下參入。有改元事。詔文云。忝居握符之名。未知馭俗之道。況此年宋異荏臻。此歲辛酉革命之符。既呈云々。改天德五年。爲應和元年。大赦天下云々とあり。此次は後一條天皇の治安元辛酉年。萬壽元甲子年。次は白河天皇の永保元辛酉年。應德元甲子年。次は崇德天皇此永治元辛酉年。近衛天皇の天養元甲子年。次は土御門天皇此建仁元辛酉年。元久元甲子年。次は龜山天皇の弘長元辛酉年。文永元甲子年。次は此時の諸勘文。革曆部類小詳あり。斯て此弘長元年此度まで此諸道博士は就て見るべし。等此勘文。まの諸卿の定少と小數十通。彼部類小擧之依が皆一向。清行朝臣此勘文も雷同して。其證文も引さる緯

候の眞實。まの其證例と爲之依。事實此當否成も。論牙依人あ。唯小彼説を。增長せる事此と多ある中。後醍醐天皇此元應三辛酉年。大外記中原師緒朝臣此奏進られある勘文。悉理と依説等れりける。延喜此御世より此度まで至る。已小八箇度其議あり。故今其成も。略文して出む。勘申。今年曆數當革命大變年。否事と題して。醍醐天皇昌泰四年。文章博士三善清行朝臣。始勘奏辛酉革命之義。如件勘文者。以神倭磐余彦天皇元年辛酉。雖當部首以今推古之義歟。天神地神之代。年紀眇遠。所見不詳。自神武天皇以降。載籍雖多。曾以不言辛酉革命之當否之義。溫漢家之濫觴。靈寶玉肇等。以黃帝十九年辛酉。雖

當部首三皇五帝大同小康之代經典之所載不論曆運之符
瑞兩朝之舊規不分明乎靈實とは本朝見在書目錄雜史家部より帝王年代曆十卷釋靈實撰とある書此説云ひ王肇をハ是より以前此勘文とも小王肇開元曆紀經と引る書此説云ふ二書共小今傳はらばるく余未そ此書等を見然れども是を以前に勘大とも小王肇開元曆紀經云臣謹察帝王之受命必在三元甲子之年而或以辛酉為革命或以戊午為革命進退雖異期數略同推年數法或以四六二六而乘之或以十周三百六十歲而推之自元甲子以三乘六為陽乘之一變次以四乘六為陰乘之一變云くを引交釋靈實年代曆を周穆王四十二年辛酉以後僖王三年辛酉以前有一甲子之得失然則黃帝十九年辛酉以後三千九百年云く形と所見るを云ふ靈實王肇を小唐件朝臣為道之碩儒究算術勘奏之趣遵代之人と聞えさり行之跡差久矣然者何閣本朝之先規可勘異域之年紀乎須以昌泰四年之奏狀為本而彼朝臣者達消息之德計大變之

年其術已絶師説不慙短慮之末愚輒難測其心縱雖有權分非可指南於昌泰以前者四六二六之乘數年紀已不同以此術猶可令增減乘數哉否一決仍就常説自昌泰四年至治安元年為二六之年自治安元年至文應二年為四六之年仲年相當革命大變之年故自文應二年至當年僅以六十年未及二六之年於今年者更不可當革命大變者哉と記し
此大
臣一決と云はゞ其心裡を辛酉年を革命大變君臣剋賊の凶年を云ふを清行朝臣の新意ありと厭おる短慮の末愚を以ては其心を測り難しを謙遜して所詮去る昌泰四年小清行此始めを奏せる以來此先規ある其を本を云ふ殊り異域の例を探ぬる事非と云れしあり
次よ易緯説有疑難事と題して清行朝臣本勘文云易緯云

辛酉爲革命甲子爲革命鄭玄云天道不遠三五而反六甲爲一元四六二六交相乘七元有三變三七相乘二十一元爲一節合千三百二十年同勘奏曰謹按易緯以辛酉爲節首詩緯以戊午爲節首雖有兩說猶可依易緯也云就之按之易緯十卷中曾無此文此外有他緯哉否雖勘現在書目錄亦以無所見粗考典籍五經曆算引易說有此文同曆記經歟現在書目録と其寛平此御世勅を奉て藤原佐世朝臣比撰る物小て其頃まて見在せる赤縣籍とと部類せる目録あり橋本經亮が梅窓筆記より河海抄より日本現在書目録藤原佐世撰大和室生寺の印ある古本粘葉一冊書肆が買得しを見る小五六百年前此古本小て部門を立て書目あり佐世は藤氏の儒士名て宇多醍醐の朝此人がて云るを即此書名て先年待谷望之が京小て直を於たり買もて來しハ即經亮が見し本小て實小も大和室生寺といふ朱印あり余

が本はそ哉寫せる形り題名は日本國見在書目録と有りて現字がら交正五位下行陸奥守兼上野權公藤原朝臣佐世奉勅撰と署ちれり此録此異說家といふ部より易緯十卷鄭玄注を出されど信り此外より易緯の書を有こやあし扱五經曆算とハ同録の曆數家と云る部より五經算二とあり書此事ある法し易緯を今此世より悉傳はれど五經曆算を今存りや亡し尚書正義云緯文鄙近不出聖人前賢共疑有所不取也毛詩正義云緯候之說偽多而實少也今就是等之文按其義緯候之說偽謬而實少縱雖本書說文不足爲證矧亦其文不詳彌招疑殆者歟凡聖人之道者與天地合其德與日月同其明與四時合其序應于天心揣於人事轉咎徵彰休皇道不遠惟善惟與之故也縱據緯候之說何恐革命哉隨又於今度之辛酉者雖當一元之巡全不及大變之期哉此件の論も理

年を爲給する。其時の詔書小。曆數當辛酉之年。符契稱革
命之運。是則出自緯候之新意。非于典籍之舊章。術士之家所
著作也。聖人之道。豈可然乎。但與物更始者。恒久之理也。と載
させ給ふ由。是時の例文。所見少。師緒朝臣此勘文小。
緯候此説字難斥せ由を實然る事と所聞看せる故。此由
詔詞此有し。是をり後。永徳元年此度の公卿仗議
披清行之勘文。重訪昌泰之盤觴。只據革卦之義。不據詩曆之
異義。偏取神武之上元。不取黃帝之初元。先達之所爲。後生無
間然者。欤。凡變革之儀。當否之論。偏出于緯候之妄誕。未聞聖
人之法言。一變之期。縱雖相當。焉大德之至。何有所懼矣。災妖
不勝。善政。夢怪。不勝。善行之故也。況其不當乎。云々。侍從藤原
公時。卿の定。辛酉沙汰之盤觴者。昌泰清行之奏。狀不據黃
帝之上元。可取神武之初首。之條。坦然明白。仍以本朝之當否。
據詩緯説者。夫緯織伎數之流。偽多實少。之謂先賢後儒。雖加

疑難。聊以愚管。強窺理窟。小道可見。未應偏棄。致遠恐泥。不可
固執者。欤。云々。嘉吉元年。此度の曆博士賀茂。在盛同博士賀
茂。在成。形どの勘文。夫捨平王以上。斷神武以下。爲部首者。
清行之新意也。遠通物理。克明人道。議論得玄旨。出于天入乎。
瀾相公之事迹。誰欺之乎。而窺彼昌泰之載籍。特匪易説。可檢
詩説之證。坦然明白也。あど云。依類の緯候説。拘そら。交清
行の新意と。知れる人。此有るも。皆師緒朝臣此勘文。あど。し
以來。あれぞ。彼朝臣の説。を。上。件。此。説。等。の。嗚。矢。木。鐸。を。そ。云。
べ。の。で。前。醍醐天皇此御世。始は。さ。由。説。乃。後。醍醐天皇此
御世。乃至。六。七。四。百。二。十。年。ふ。く。て。其。説。此。か。く。定。は。れる。
事。多。奇。寓。と。謂。ふ。也。但。し。此。御。世。も。辛。酉。の。改。元。の。み。小。非
後。龜。山。天。皇。の。弘。和。元。辛。酉。年。元。中。元。甲。子。年。此。時。北。朝。を。至
後。圓。融。院。此。御。世。に。て。辛。酉。年。元。中。元。甲。子。年。此。時。北。朝。を。至
徳。と。改。元。し。給。り。次。を。後。花園。天。皇。此。嘉。吉。元。辛。酉。年。文。安
元。甲。子。年。次。を。後。相。原。天。皇。此。文。龜。元。辛。酉。年。永。正。元。甲。子。年。
此。時。北。朝。を。至。同。七。年。は。甲。子。に。當。れ。ど。改。元。あ。く。次。を。後。水。尾。天。皇。の。元。和

七年と云ふ年も辛酉尙當れど改元ありしそは世比中い
く乱れて此沙汰り及ぼざりし故なり然て同十甲子年小
寛永改元あり是より革命革命令此改元再興して聖元天
皇此天和元辛酉年貞享元甲子年次を櫻町天皇の寛保元
辛酉年延享元甲子年次を今太上天皇の享和元辛酉年
文化元甲子年と相續まて必改元し給ふ例とは成れり
て此革命革命令云こと右の如く清行朝臣此新意は出
ぬ事形る故り赤縣此歴史及び會易書類も此年此改元
といふ事也聞ゆる事あり但し詩の正義も鄭玄が六藝論
を引たり詩緯汎歷樞云午亥之際爲革命卯酉之際爲改政
卯天保也酉祈父也午采芑也亥大明也云々有るハ似
る事形ら此義は非也

弘仁歷運記考下之卷

三本國書心委
大壑 平篤胤謹撰
門 參 鈴木重野
人 河 岩崎兌健
國 竹尾茂樹 校 同

四

今都計自僖王二年庚申以往神農元年丁亥以降則歷二
皇五帝三王摠十代七十九王加帝摯及昇則二千四百三
十四年也此天皇元年以往漢地歷年代之數也

此條を神武天皇即位前此庚申年より以往の年歴を傳
し古説ふれども殊り慙懃に讀辨ふるし其をほむ僖王二年
は惠王十七年不改むるを中前條云依が如し扱神農

は。也。伏義と有、其、依を。後人此、狡意を用ひて。譌寫せる形
り。其、何、成もて知、あれど。歷、二皇五帝三王、摠、十代。と云、依
文、相照して。おれを、知れり。然、るは二皇を、三皇、一皇
を、缺、之、依、語、亦、有。此、文、謂、ゆる三皇五帝は。古、説、此、三皇五
帝、非、交。儒家、此、謂、ゆる三皇五帝、非、也。其、三皇を、伏義、神農、
黃帝、成、云、ひ。五帝を、少昊、顓頊、帝嚳、堯、舜、を、云、り。此、を、周禮。
ま、之、尚書、也。孔安國、傳、此、本、於、依、説、也。古、傳、説、の
皇、大、れ、と、殊、小、して。三皇を、ハ、天皇、地皇、人皇、を、云、ひ。五帝を、
伏義、神農、黃帝、少昊、顓頊、を、云、り。尚、異、説、と、も、多、う、る、を、
後、儒、此、を、辨、別、之、依、説、を、有、去、を、無、し、予、が
三、五、本、國、考、小、委、と、説、明、せ、る、を、見、る、を、
周、の、三、代、を、指、す、也。何、此、由、り、三皇と云は、交。二皇と云、依、を

謂、ふ、り。上、小、伏義元年丁亥以降、を、云、ひ、故、に。神農、黃帝、を
指、して。二皇と稱、牙、依、文、也。也、今、本、此、如、く。神農、を、ら、む
亦、也。伏義、を、其、上、り、有、れ、む。神農、の、次、也。黃帝、一皇、也。成、云、
二皇、云、む、や。若、例、此、曲、士、あ、り、て。二皇を、一皇、此、誤、寫、と、云、
は、む、と、欲、を、と、也。然、て、は、摠、十代、也。有、依、り、代、數、合、ざ、れば。然、
を、証、の、多、事、也。今、在、る、刻、本、を、見、る、に。歷、二皇、五帝、三王、
於、此、よ、三皇、を、云、ふ、言、也。此、言、は、れ、て、在、る、に。故、り、誤、り、て、三皇
と、書、と、る、也。板、本、彫、也。後、り、心、持、て、上、に、一、画、を、削、れ、る
故、り、二、字、の、誤、れ、小、見、ゆ、る、也。古、は、て、伏義、を、神農、と、譌、寫
本、を、何、れ、も、正、志、く、二皇と、あ、り、
世、依、所、以、い、の、小、を、言、ふ、り。下、文、也。二、千、四、百、三、十、四、年、と、云、
依、を。即、伏義元年と、り。神武、天皇、元年、小、至、依、年、數、を、る、也。彼、

國籍此妄説と云ふ。伏羲と云ふ周末に至る年數は三十万載と云ふ。始於若干万歳と云はるを無と云ふ。然る多年數り此を考ふ。此と相違する少年數ある故に。神農と書う牙を。其二千四百三十四年を。神農元年以降。神武天皇元年以往此年數りせむと。構牙と云ふあり。何れ校意の甚しきと云ふ非也。上惠王十七年辛酉と云ふ。履癸を。僖王三年辛酉と云ふを始め。次々より。惠王を。僖王と云ふを。紀年を能くし替り知ざりし。撰者此真の過失なれど。伏羲を神農を。諷罵せし事と。過失非也。後人此を物せる。誣妄あること。疑ひあり。○摠十代。七十九王を。二皇五帝と。夏殷周此三代を。ふて。摠て十代あるが。其夏殷二代の王等。周を。僖王まで。十七代を。摠多は。王數あり。此王等此數。まじりて。已が數牙正して。古史年歷編り載せるを。ハ相違あれど。今此

要み非ざれを云は。交は。謂ゆる七十九王。注ある帝摠と。皇と。加ふと。八十一人あり。は無し。然るを八十三皇と有る。は。其間此年數を。二千四百三十四年を有は。伏羲元年と云ふ。神武天皇元年此前年。庚申。至は。年數あるが。此を伏羲元年と云ふ。丁亥より取れる故に。三十四年此過年あり。實は。命歴序考に註せは。如く。伏羲氏。馭戎此元年と。庚申。謂ゆる丁亥より。三十三年後あり。然れを。上を。伏羲元年。庚申を有る。此年數を。二千四百年と有るを。謂ふ。然れど。丁亥と有は。も。皇朝の傳は。一説あり。僅に三十三年。此牝梧なれど。然しも。遠を。訛るを。非也。抑此年數を。神武天皇元年以往。漢地歷年代此數を爲は。命歴序考に。

學此徒小見狹文倫多神世此昔とて此往來せ
事迹の加し古書ども小甚詳や見え此を尋むも
此と心得たるの應神天皇此御世り韓博士ら成徴れども
何と心得たるの國邊の事絶て知看れ如く謂ふも有
る以前そかの國邊の事絶て知看れ如く謂ふも有
れど然るを非ざるは仲哀天皇此神の御言を信給は夏高
御う人登せ望し給ふ國を神の御言を信給は夏高
て朝廷を是たり前給之他國の事を見んやさぬ證を爲
免れど早く神世小須佐之男神の天立り外國を廻
り韓國小至り給ひ少彦名神大物主神也此往來せ
依傳ありまの仲哀天皇より先皇とち御世り大迦羅國
此人まの新羅國の人ふど此參來てし事如御坐し故
此韓征の御心の進はまて神此御言を傷りし故
も韓征の御心の進はまて神此御言を傷りし故
神此御怒ありしを見るや猶ほと是小就て按ふり平城天
古史傳小謂ふを見るや猶ほと是小就て按ふり平城天
皇紀大同四年此所小二月辛亥勅倭漢摠歷帝譜圖天御中
主尊標爲始祖至如魯王吳王高麗王漢高祖命等接其後裔

倭漢雜糅敢垢天宗愚民迷執輒謂實錄宜諸司官人等所藏
皆進若^レ有^レ挾情隱匿^レ乖^レ旨不^レ進者事覺之日必處重科と見え
とゆ。舊く和漢此歷運文記せ依書此種々有る中亦多然
依妄書此有る故り此勅あり歷運記を是勅ありて二年
後小成れる書也後小延喜式小添て傳はれ依を朝廷小
も此記を用ひ給ふ依りこそ。

五
但伏羲氏以前。天皇以還。年代綿邈。史無詳錄。按帝系譜等
諸書。摠歷八代。九百六十八萬餘歲。既非經史。未爲實錄。聊
復存之。以廣異同。
此條亦かく伏羲氏以前と有依を以ても前條に神農と有

依を。もや伏羲と有し。故謄寫せることを灼然ふり。其はとく
彼を。固より神農と有む。此も必神農を無くては。應
ぎ依事ある。故や。然る道理までを思はば。彼の之書。牙
小。往々か。古書此謄。文。攬入ふ。ど。小。此。ある。天皇を。か。此。古
三皇の天皇氏を申せり。此を春秋命歴序小。天地初立有。天
皇氏。と云。依如く。古。け。れ。を。是。より。以。還。伏羲氏まで。此。年。數
を。知。む。を。欲。ふ。よ。年。代。綿。邈。と。遠。く。詳。よ。録。せ。依。史。取。く。其。
正。説。を。得。ぎ。依。故。り。帝。系。譜。等。此。諸。書。を。按。ぐ。る。小。天。皇。氏。と
り。伏。羲。の。間。は。八。代。あ。り。て。九。百。六。十。八。万。餘。歳。を。歴。之。依。由。
ふ。れ。ど。此。等。を。經。史。の。非。疑。實。録。と。爲。は。る。者。あ。り。然。れ。ど。也。

聊々此年數代數を存して。異同茂廣む。と云。依。か。り。帝。系。譜
此。梁。蕭。吉。が。五。行。大。義。に。往。々。引。之。れ。を。古。の。書。に。有。れ。ど。
其。説。い。ふ。も。信。ら。れ。ぬ。事。あ。り。皇。國。の。も。早。く。渡。り。故。り。
歴。運。記。の。撰。者。を。見。之。る。由。ふ。れ。ど。寛。平。の。見。在。書。目。録。に。此。
書。名。無。れ。む。其。項。を。絶。ふ。る。小。こ。今。の。西。土。の。も。存。り。や。亡。
引。之。る。書。れ。ら。む。を。思。ひ。し。う。が。別。書。と。聞。え。之。り。然。れ。ど。
此。帝。系。譜。の。み。小。非。疑。其。謂。由。る。經。史。の。實。録。と。云。牙。を。也。頃
小。を。信。ら。れ。ぬ。他。の。書。を。め。は。却。り。て。訛。れ。る。説。も。多。記。ふ。也。
命。歴。序。考。此。彼。此。の。論。牙。依。が。如。し。ま。の。別。の。著。せ。る。夏。殷。周
も。見。て。知。は。る。中。昔。の。頃。を。め。是。歴。運。記。の。働。牙。依。り。や。帝。王
編。年。記。愚。管。抄。神。皇。正。統。紀。ま。の。和。漢。合。運。圖。ま。の。此。類。ひ。和
漢。此。紀。年。を。合。運。し。て。記。せ。る。書。と。を。許。多。あ。り。然。依。り。神。武

天皇以前を合運せしむ。皆かた訛おち也。漢籍等も據るれ
を。彼此共々據るる不足らば然れど。其後此紀年小也。然し
甚し相違れ。其の中も合運圖を古けれむ。他書小所
見あき故實も往々小見えぬ也。抑是書はも洛下瑩釋圓智
と署せぬが其圓智と云ふは群書一覽よ京此要法寺代世
雄房日性云ひ僧ありと見え光由も武德編年集成慶
長十一年八月の下小洛此大商人角倉貞順玄之が父也
吉田光由入道了意俗稱を與七郎と云ふ者あり云ふり
然るは此合運圖はも去此二人が新し作れる物も非也
そは京の東寺中此觀智院に佛法和漢年代曆と云ふ西土
後漢明帝の永平十年以後皇國を垂仁天皇九十六年と
推古天皇二十五年まで撰記して本注に兩國年曆雖異説
多正依貞元釋教目錄兼抄諸家。和漢年代記矣と云ひ與
觀應元年四月廿五日校諸本畢とある卷本を藏せり成伴
信友が此合運と校合せ候ふ互に精粗ありほと大く相違
此事もあり按ふ此合運圖も古く傳はれり物なり次々加

筆せぬ物なりと云ふ今按ふ旨あれむ。印本合運圖は初發
り誠然る言なり。今按ふ旨あれむ。印本合運圖は初發
り出せ候。謂ゆる天神七代。地神五代の歷年哉。あつ小附録
し。此度こは考牙小就て。借集多る。其類書ども此異同を標
し。其體裁を令知るこ也。左に如し。○天神七代。國常立
尊。國狹槌尊。百億万歲。豐斟滄尊。百億万歲。泥土煮尊。二百億
沙土煮尊。
萬歲。大戸道尊。二百億萬歲。面足尊。二百億萬歲。伊弉諾尊。二
大戸邊尊。惶根尊。
萬三千四十歲。地神五代。天照太神。二十五萬歲。忍穗耳尊。三
十萬歲。瓊々杵尊。三十一萬歲。彥火々出見尊。六十三萬七千
八百九十二歲。鸕鷀草葺不合尊。八十三萬六千四十二歲。
印本此倭漢合運圖あり。○は一本。天神祇王代記。它題せ候書也。天神

七代國常立尊男神。天皇氏。治世五万四千年。國狹槌尊男神。
 地皇氏。治世三万三千六百年。豐斟滄尊男神。人皇氏。治世九
 十二万一千六百年。泥土煮尊男神。治世。大戸道尊男神。治世。沙土煮尊女神。治世。大戸辺尊女神。治世。
 二十三万四百年。面足尊男神。治世五万七千六百年。伊弉諾尊男神。伊弉冉尊女神。伊弉冉尊女神。治世九千四百廿九年。瓊々杵尊。
 伊弉冉尊女神。神農氏。地神五代。天照太神。治世九千四百廿九年。瓊々杵尊。
 尊女神。治世八十八万三千九百廿九年。彦火々出見尊。治世六十
 千也。忍穗耳尊。治世八十八万三千九百廿九年。瓊々杵尊。
 治世。三十一万八千五百四十二年。彦火々出見尊。治世六十
 三万七千八百九十二年。鸕鷀草葺不合尊。治世八十三万六
 千四十二年とあり。此屋代翁此藏書ある書中。後花を寛正の頃製れる書なるを。御傳を記さ。然れ常立尊。如と。三皇及び神農氏。如と。當と。は。此。餘。如
園院を當今と書。御傳を記さ。然れ常立尊。如と。三皇及び神農氏。如と。當と。は。此。餘。如

な事。○は。一本。日本運上録。と題せ。依書。天神七代。國
 常立尊。右第一代。謂。無量無邊。无始無終。不變常住。神代。と記
 し。第六代まで。合運圖。を同年數ふる。其數上。り。如運數
 の二字を冠す。第七代。神代所。り。一代二神。治二万三千歲。謂。
 天地循環變化常住。神代。を書記。地神五代。天照太神。治天二
 十五萬歲。自甲子。至癸丑。忍穗耳尊。治天三十萬歲。自甲子。至癸巳。瓊々杵尊。
 治世。卅一萬八千五百四十三年。自甲午。至丙戌。此彦火々出見尊。治世。六十三万七千八百九十二年。自丁亥。至戊午。第四代尊神。治六十三万七千八百九十二年之内。七万三千八百三十七。戊申歲。盤古王生。鸕鷀草葺不合尊。治世八十三万六千四十二歲。自己未。至丁未。右三代。謂。下化現量神代。云々。
神初而降。化下界。

○弘仁歷運記考下
 ○八

温故堂の藏書ふて是より後を人皇と題して神武天皇より
継體天皇十五年までは御謚の下に即位治世の年數御
父此事如く少く記し継體天皇十六年より年表して記事
あり正親町院を今上皇帝と奉るは下天正八庚辰年十一
月十六日此記事を同筆するは此の當時此書と見え
其後年次々小書繼するは此の文體書風共異れり然
れバ天正本運上 ○又一本多小年代記と題せる書小謂
ゆる天神七代を合運圖に同く然して天照皇太神宮治世
五千二十八万七千六百七年天忍穗耳尊治世同前也已上
二神御坐天宮而不下此國と記して其以下は合運圖に同
じ。去を屋代翁の藏本あり文祿五年まであり筆
まをたぬこと然れども文祿年代記と稱ふるは ○まの一
本只り王代記と題せる書り忍穗耳尊より上を合運圖に
同くして彦火瓊々杵尊元年己巳三十一万八千五百四十二

年彦火々出見尊元年丁未六十三万七千八百九十二年葺
不合尊元年己卯八十三万六千四十二年神武天皇即位元
年辛酉正月一日震且周惠王也云々をあり去を温故堂此
藏本あり百五
代後土御門院を當今帝とあれ して群書一覽小和漢編于
む文正本王代記と云云云 して群書一覽小和漢編于
支合圖一卷正和四年東福寺虎關和尚作と云る書あり已
いはぶ其書を見ざれど此僧此元亨釋書小白山明神者伊
弉諾尊也とて此神の神語なる由あり神世此年歴を載せ
る小准牙をそ此書は凡そ推量られしなり其謂ゆる神語
津嶋本是神國也國常立等乃神代最初國主也次國狹槌等
次豐斟滄等次泥土瓊等沙土瓊等次大戸之道等次大苦辺等
次面垂等惶根等次伊弉諾等伊弉冉等謂之天神七代吾是
伊弉諾等也今号妙理大菩薩此神岳白嶺者我主國之時都

城也。我乃日域男女之元神也。天照太神者我子也。天忍穗耳等。我孫也。其子天津彦火瓊杵等受祖天照太神勅降治此國。始為地居。饗國三十一萬八千五百四十二年。生彦火瓊杵。見等饗國六十三萬七千八百九十二年。生彦波瀲武鸕鷁草葺不合等。饗國八十三萬六千四十二年。是名地神五代。人王第一國主。神武天皇者。鸕鷁草葺第四子也。在位七十六歲。天皇年四十六。始登皇位。辛酉歲也。云々。を
本此餘尔伴信友
本種々の妄説と書けり。けり。を
ガ合運圖を撰せる。東寺此佛法和漢年代曆。是と文明本。王代記。應安本年代記。永祿本倭漢合圖。凡と皆右此類。されむ。
神武天皇以上此合運を。總て無用此長物のみと知る。是し。然れど此御世を。以來此事實を擧る。中も各々採。用ふ。是き事等も少う。其故其取々。異なる。此校合。信友。の。囁み。し。ら。ば。其。藏。本。此。合。運。圖。を。採。扱。神。世。此。紀。年。小。如。加。さ。る。校。は。己。が。本。小。と。寫。し。取。り。扱。扱。神。世。此。紀。年。小。如。此。亦。と。苦。心。せ。は。由。を。前。に。撰。寫。依。古。史。成。文。此。年。歷。編。を。著。

さむと欲せる故の擧ふれど。上件此書と。一部も取はる。足も此無れむ。止こを校得。又赤縣此歷年は。春秋命歷序と。竹書紀年と。校參攷し。皇朝の紀年を。日本書紀と。是歷運記を。小訂正し。彼此參伍合運して。新う古史年歷編を作れ。但し其編。國常立尊。豐斟淳尊を。本世より立て。國狹槌尊といふを。除く。是る由を。古史徴り論ひ。泥土煮沙土者尊。大戸道大戸邊尊。面足惶根尊と云ふを。本世より立ざる由を。古史傳ふ云。牙。斯。此。歷。運。記。考。を。年。歷。編。の。附。録。年。歷。編。を。彼。古。史。此。附。編。を。推。古。天。皇。此。御。世。より。筆。を。止。免。是。を。後。を。あ。ま。し。紀。年。書。小。抄。を。見。る。由。を。因。り。謂。ふ。其。紀。年。書。類。此。和。漢。

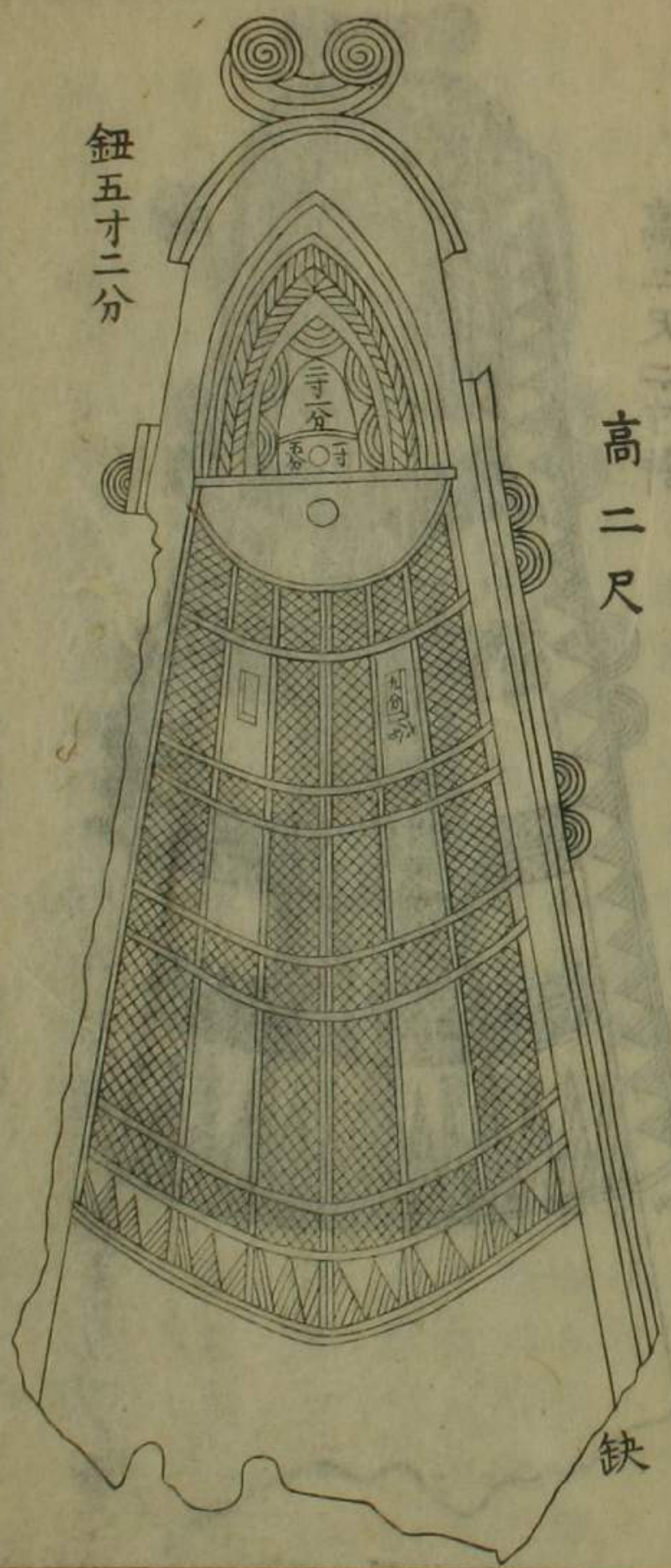
合運せるが多う海中、小體裁を記す此も和漢歴代帝王備考といふ十卷此書あり撰者此實此姓名を知られど、聚齋先生を云ひし人、吉田光由が合運圖を參補して此書を作れるをいし其門人、小山前定と云ふ序を見えて、貞享三年まて我記し其四年、杉原正範梓行せし書あり然るを俗に右此田重徳、小篠正昭、杉原正範、梓行せし書あり然るを俗に右此序を去り、書名を改免、後人此、次々小増益せど去て、撰者の真面目、我失ひと、本どを多うれど、其はあろし、舊板を索む、履し、はと、近く寛政八年、小出と、依和漢年契と云書も、便宜き物あり、學者の仇ら、又此等此書を畜ふ、但し、比校せる、舊き合運圖類を更なり、此書等、小も、天神七代地神五代と別けて、稱題せし事、中、世をり此誤を受來れる、ふて、非あり、此を曾て、古昔、如、其古事記傳、はと、鉗狂人此曲、ふ辨、牙論、はれ、多るが如し、其古事記傳、はと、鉗狂人此書、如、どを、見

○上、件、皇美麻命、此天降坐、さ、依以前、大國主、神の御世、小は、世間の風俗、大く開々、と、万、抄、此事物、之、形備はれ、也、と云ふ、説、り、想、ひ、合、次、登、き、事、此、有、る、を、因、よ、ふ、小、附

録して、我、が、按、ふ、は、小、論、ひ、定、め、て、人、を、と、し、左、は、き、右、ま、れ、其、當、否、は、神、小、質、し、賜、ら、む、と、欲、る、形、少、其、を、ま、抄、扶、桑、略、記、天、智、天、皇、七、年、此、所、り、正、月、十、七、日、於、近、江、國、志、賀、郡、建、崇、福、寺、始、令、平、地、掘、出、奇、異、寶、鐸、一、口、高、五、尺、五、寸、又、掘、出、奇、好、白、石、長、五、寸、夜、放、光、明、云、々、を、云、依、事、あり、此、小、云、々、を、約、と、此、掘、出、さ、る、小、を、を、佛、法、此、異、驗、と、や、所、思、と、り、む、天、皇、御、自、ら、御、身、我、傷、ひ、は、し、て、佛、子、供、養、し、給、り、事、小、て、見、る、を、悲、し、く、思、々、去、く、思、は、は、と、元、明、天、皇、紀、り、和、銅、六、年、七、月、丁、卯、大、倭、國、宇、太、郡、浪、坂、郷、人、大、初、位、上、村、東、人、得、銅、鐸、於、長、岡、野、地、而、獻、之、高、三、尺、口、徑、一、尺、其、制、異、常、音、協、律、呂、勅、所、司、藏、之、嵯、峨、天、皇、紀、云、弘、仁、十、二、年、五、月、丙、午、播、磨、國、有、人、掘、地、

獲一銅鐸。高三尺八寸。口徑一尺二寸。道人云。阿育王塔鐸。清和天皇紀云。貞觀二年八月十四日辛卯。參河國獻銅鐸一。高三尺四寸。徑一尺四寸。於渥美郡村松山中獲之。或曰。是阿育王之寶鐸也。あども所見とす。右四枚の銅鐸のちある何りある人。或説り。今現よ。大和國吉野山。豊臣太閤此手書此添ふ。とる銅鐸ありて。天此半ちやくを呼も此。右中此一。ふらむと謂ふれど。此を信られま。其を其謂ゆる。天此半ちやく此圖を見る。右此記録ども云。やハ。其尺寸異ふれば此。豊臣太閤の手書此文。武ゆうたつし。手がら先此若も此をハ。汝が事。いとく。武かう。杖はくを座し。當座のほう。此として。天の半ちやく。何とうるもの也。八月日邑下。判源藏とあり。やぞ。半ちやくを。寶鐸の轉記ある。其圖左

此の
とし



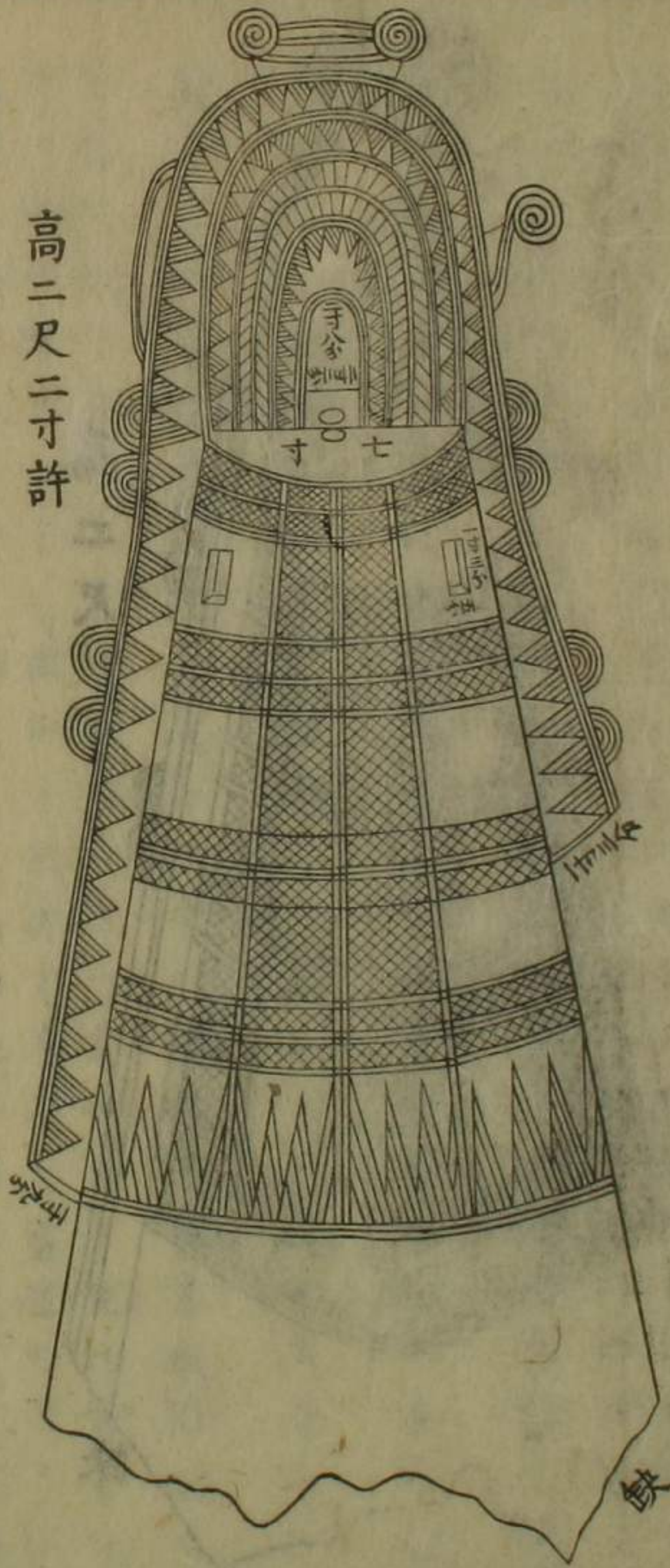
高 二尺

鈕 五寸二分

鉄

然、倭小近世。國々よ。時々古を掘、出せる事。而て各其形、状大小異ふ。倭が。已ぐ見聞よ及。修る。正し。此限を記さむ。

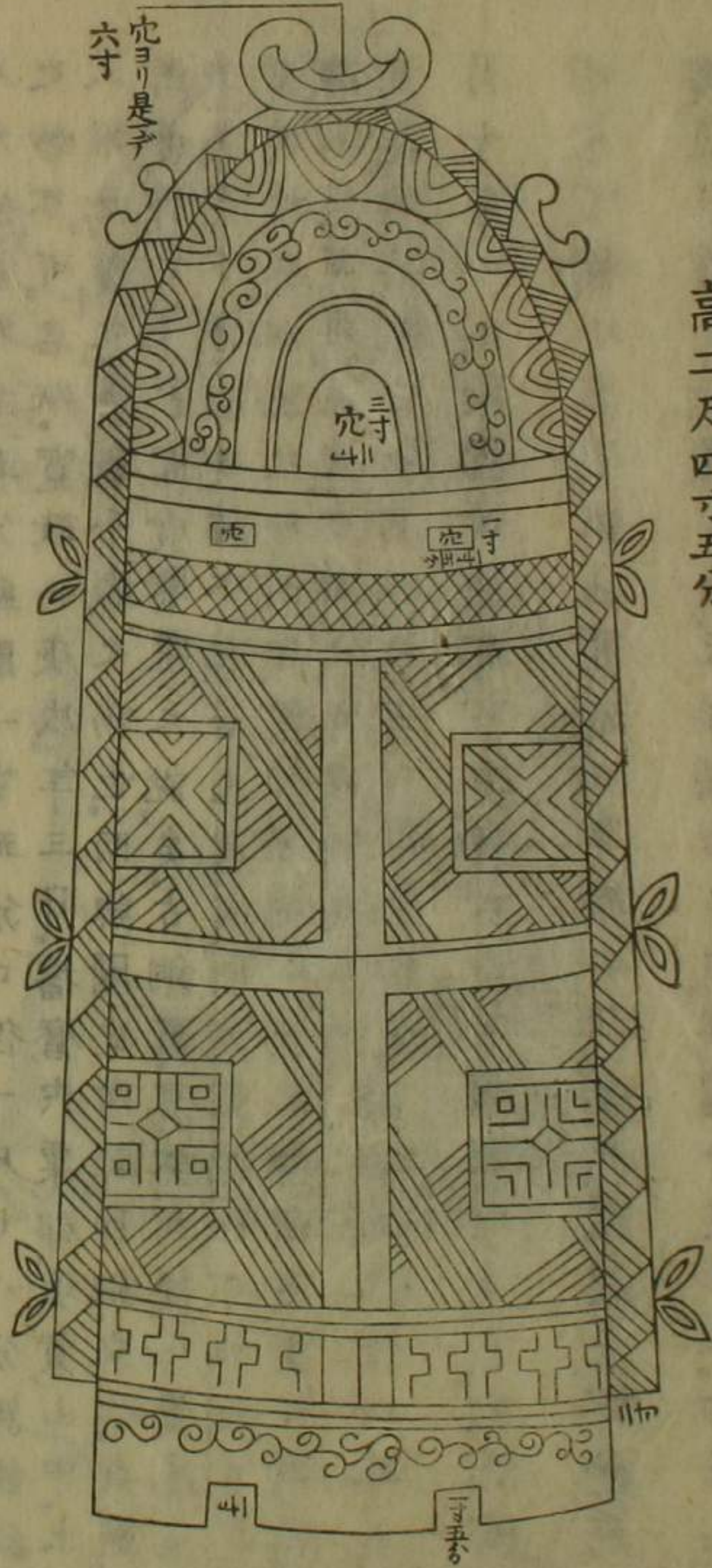
寛政二年三月。播磨國宍粟郡葛庄。須賀村の山中よ。掘獲
 たる銅鐸あり。此を我が相識れる。山田安貞と云人の所藏
 あり。其圖左此如し。



山田氏古宝鐸記云。右高三尺餘。口徑一尺餘。重四貫八百目。
 蠹蝕腐爛不可量。今隨其缺損量之。高二尺二寸許。經高一尺
 八九分。幅九寸五分。緣闊一寸五分。口徑一尺七八分許。飾紋
 之妙不可名。狀寬政二庚戌年三月。播磨國宍粟郡須賀山中土
 人掘地獲之。蓋數千歲之物也。而與國史所記和銅弘仁貞觀
 所獲符合。予曾聞賞鑒家之說矣。古銅器有依元樣而質造之
 者。其質不密。而其鏽不古。若夫其真。則其質似粗。而質密不
 密。其妙在粗密之外。而其鏽映朝陽。則五彩爛然。電製虹濟。炫
 耀人目。莫得正視。是謂之真古物矣。今之偽。偽之文化十一年五
 月十七日。同國佐用郡下本郷村よ。掘出せるも。大抵同
 形。りて。稍小なり。高之寛政四年閏二月。參河國渥美郡神戸
 郷。谷口村と云處より。三枚掘出せり。其圖を見。亦小。一は山
 田氏此中大抵相似。高さ三尺四寸。重さ九貫目とあり。餘
 の二枚。此圖左の如し。

寛政四年閏二月三河國渥美郡谷口村所出

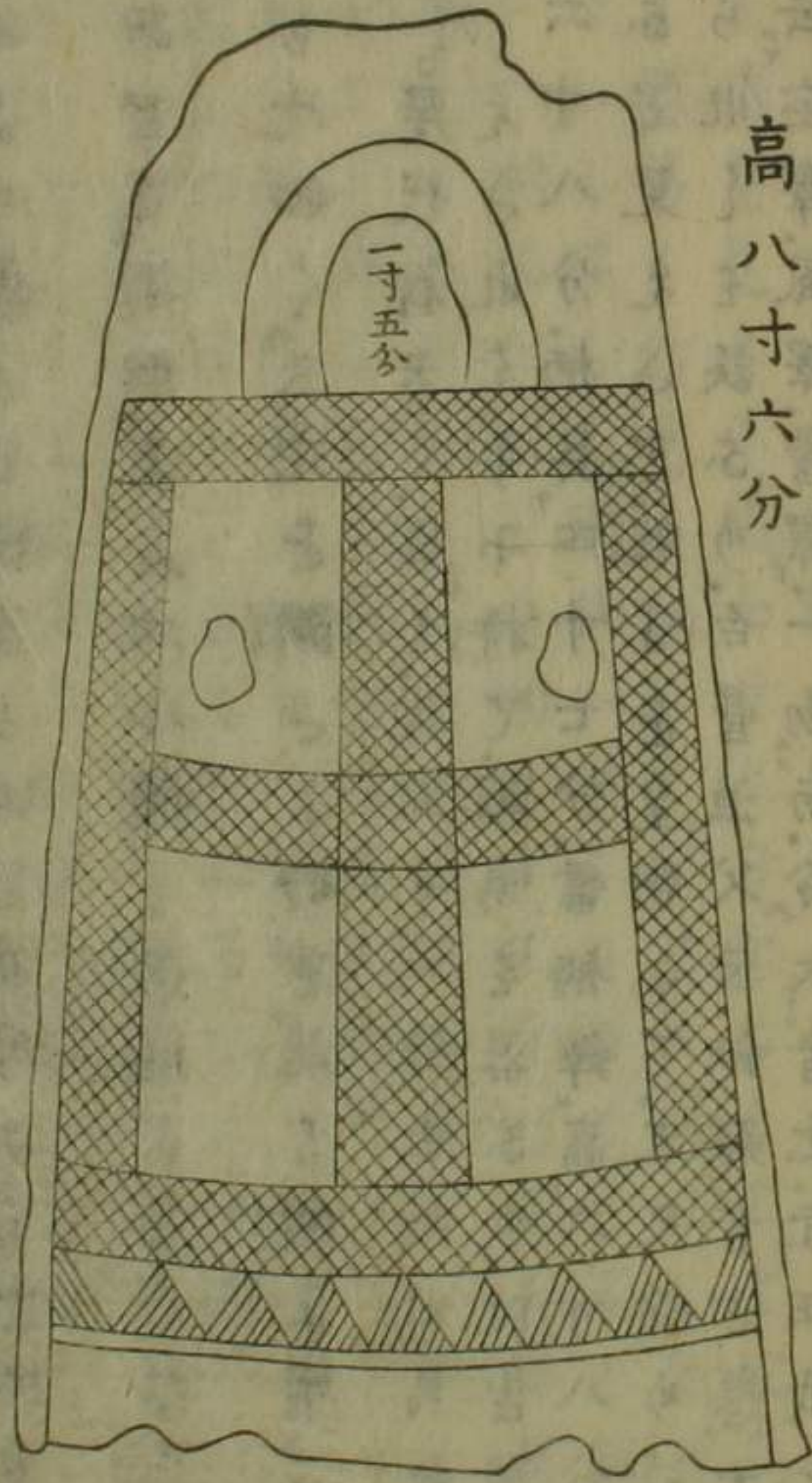
高二尺四寸五分



重サ八貫目

同上

高八寸六分



分五寸六徑

此後同十年比十二月同國額田郡洞村よで掘出せり。
 と云ふも大抵山田氏の空相似とて。右播磨国のと。参河國
 と云ふと同國にて。う於参河國を郡も同じ渥美ある由あり。
 以て聞え殊に村松と谷口とは一里許り隔れる所れ也。と
 聞ゆ。亦中屋代翁此見聞及ぞれし。古銅鐸の圖ともふ。明

和九年小遠江國佐野郡長谷村より出たる鐸。まゝ安永六年小河内國の郡を知らず。寺臺村と云よ。掘出たる鐸。まゝ享和元年八月小遠江國白須賀驛の近山よ。掘出せる鐸三枚。文政八年九月七日小伊勢國壹志郡下川口村の東。風呂谷より獲たる鐸。ちと。其外おも。出所を知らぬ五六品ありて。其形。まゝ大小種くあれど。多くは上よ出せる鐸ども。此如く。三穴を開たる。此を何よ用と。依器。詳。あら。屋代翁云く。鐸。説文。大鈴也。兩司馬執鐸。と見鳳鐸。高六寸八分。柄長四寸七分。雷柄鐸。高六寸八分。柄長三寸八分。ちと。見え。然るを皇朝。小て五尺餘。の鐘を。鐸と名。付られし。を誤。ち。白菅漁父云。銅鐸。昔古懸。大伽藍之四隅。又云。宝鐸。風鐸。擔鐸。一物。而鈴。大者也。元征戰之調度。后

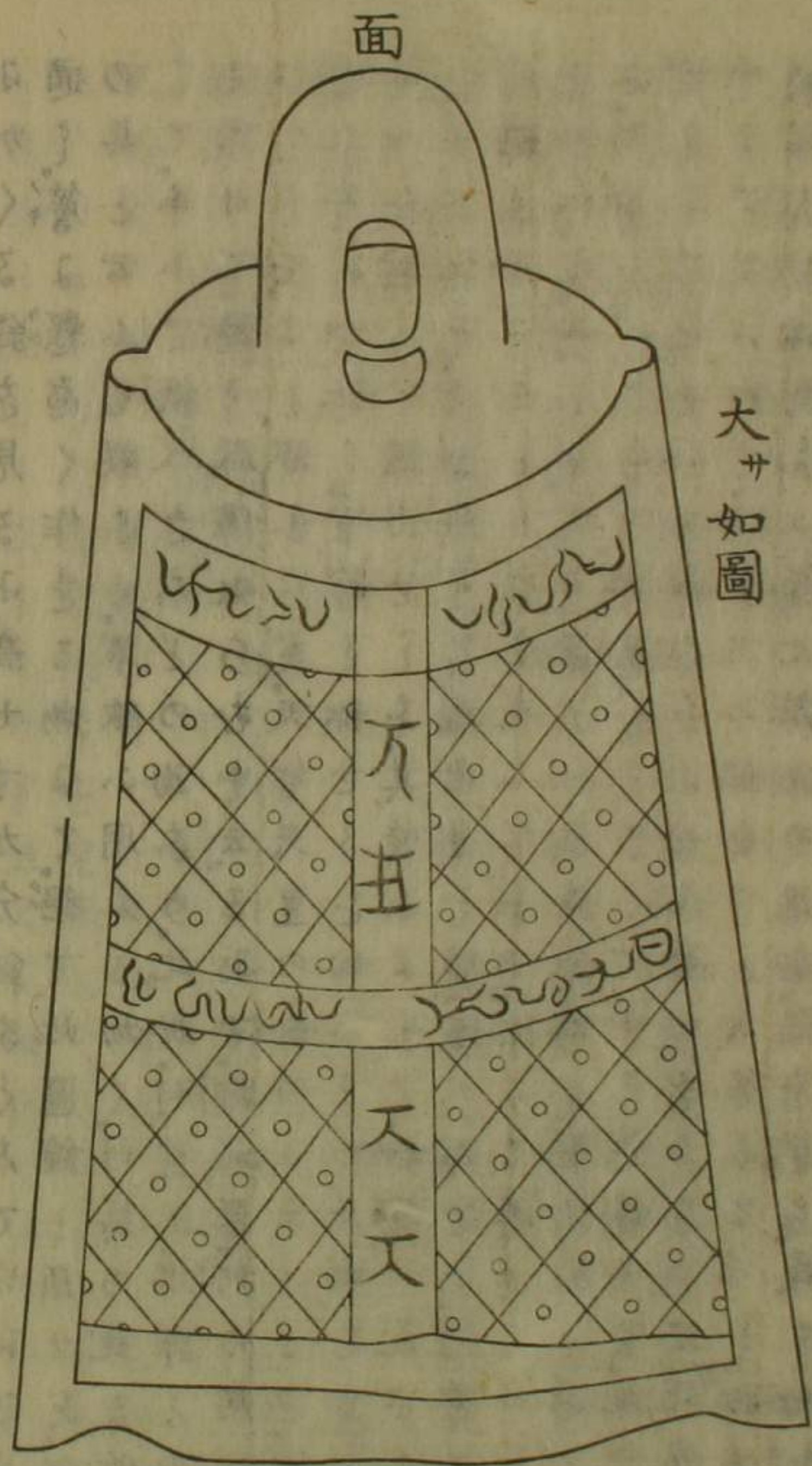
以。為。佛。器。と云へれど。風鐸。も。區。ある。物。も。非。非。京。の。八。坂。塔。小。か。く。鐸。を。見。る。小。高。七。寸。九。分。鈕。ち。く。ち。て。穴。は。舌。を。通。し。簷。も。懸。ち。く。作。る。物。も。絶。て。此。區。鐘。と。類。せ。征。戰。の。具。と。云。ふ。も。誤。ち。軍。旅。に。用。ふ。物。も。此。説。阿。育。王。塔。鐸。と。云。ひ。因。り。て。誤。ち。風。鐸。れ。ら。む。云。る。也。抑。此。器。何。の。用。に。用。ひ。し。と。云。こ。と。詳。ち。交。天。智。天。皇。の。御。時。よ。出。た。る。を。當。時。已。小。奇。異。を。稱。し。宝。鐸。と。稱。せ。る。を。始。め。り。て。元。明。天。皇。の。御。時。大。和。國。よ。て。掘。出。せ。し。を。其。質。小。よ。り。て。銅。鐸。と。記。さ。れ。弘。仁。十。二。年。ち。播。磨。國。り。て。掘。出。せ。し。時。道。人。あ。り。て。阿。育。王。塔。鐸。と。云。ふ。と。云。し。ら。ば。貞。觀。二。年。參。河。國。よ。て。獲。た。る。を。も。然。ち。云。へ。り。按。ふ。に。此。も。唐。大。和。尚。東。征。傳。小。明。州。の。阿。育。王。寺。小。阿。育。王。塔。あり。其。塔。露。盤。を。ち。て。中。に。懸。鐘。あり。地。中。に。埋。没。し。て。能。く。知。る。者。ち。と。云。ふ。事。の。有。る。を。以。て。此。器。地。中。よ。り。出。た。れ。ど。阿。育。王。の。鐸。形。也。と。云。ふ。ち。或。は。右。の。區。鐘。も。銑。間。ま。の。舞。上。鼓。鉦。の。辺。に。穴。を。穿。ち。或。は。切。欠。と。る。と。律。呂。を。調。ふ。る。ち。考。ふ。る。に。此。器。も。音。律。の。と。免。小。制。小。協。ふ。と。云。ふ。ち。合。せ。考。ふ。る。に。此。器。も。音。律。の。と。免。小。制。れ。り。然。も。有。る。と。云。は。て。其。出。た。る。時。を。詳。ち。ら。祿。上。野。

○弘仁歷運記考下

○十五

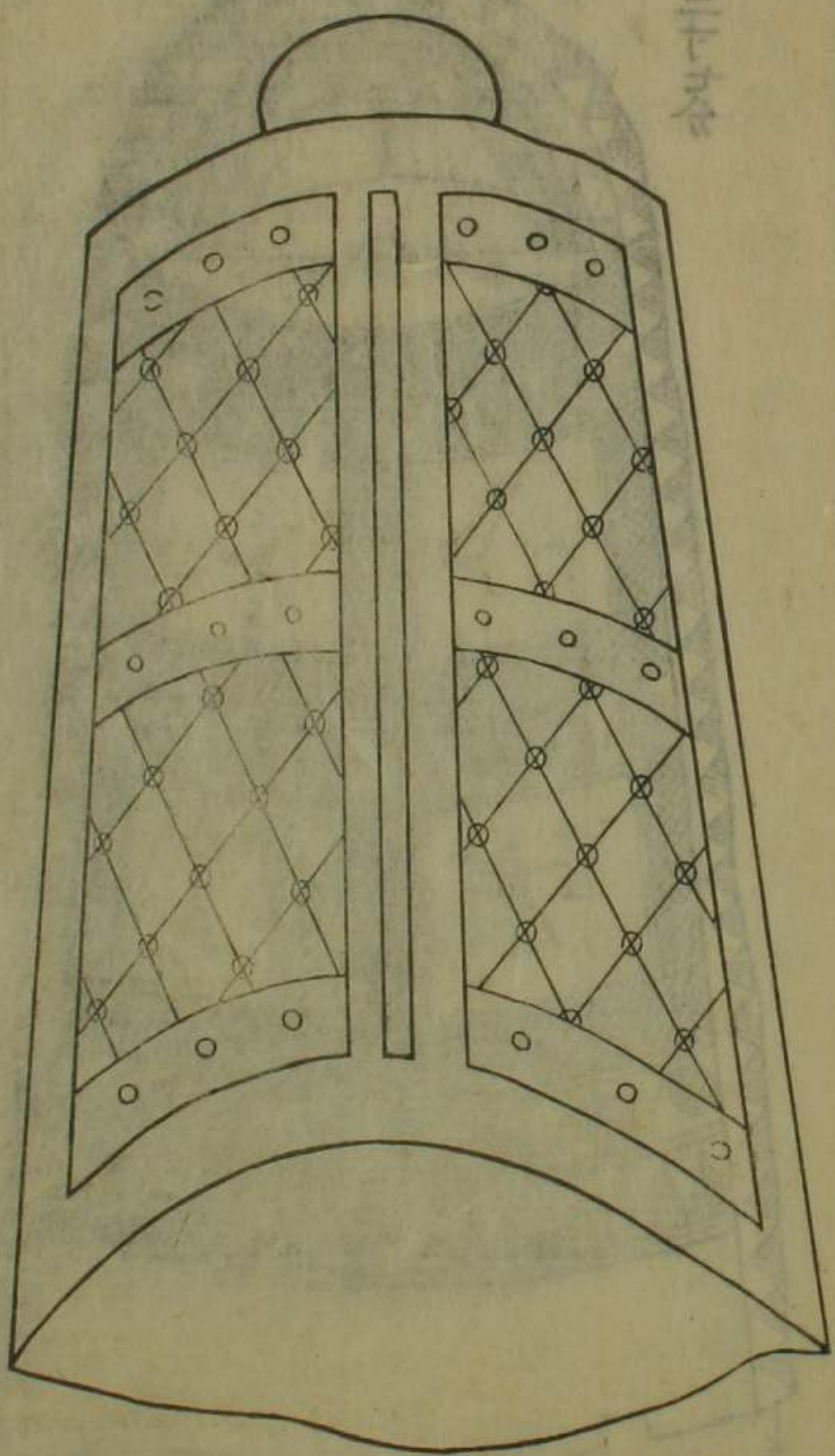
國綠野郡落合村に依。七興山宗永寺。境内の古墳より。掘獲
 多と云ふ銅鐸也。其形状左に示す。

大サ如圖



面

銅鐸

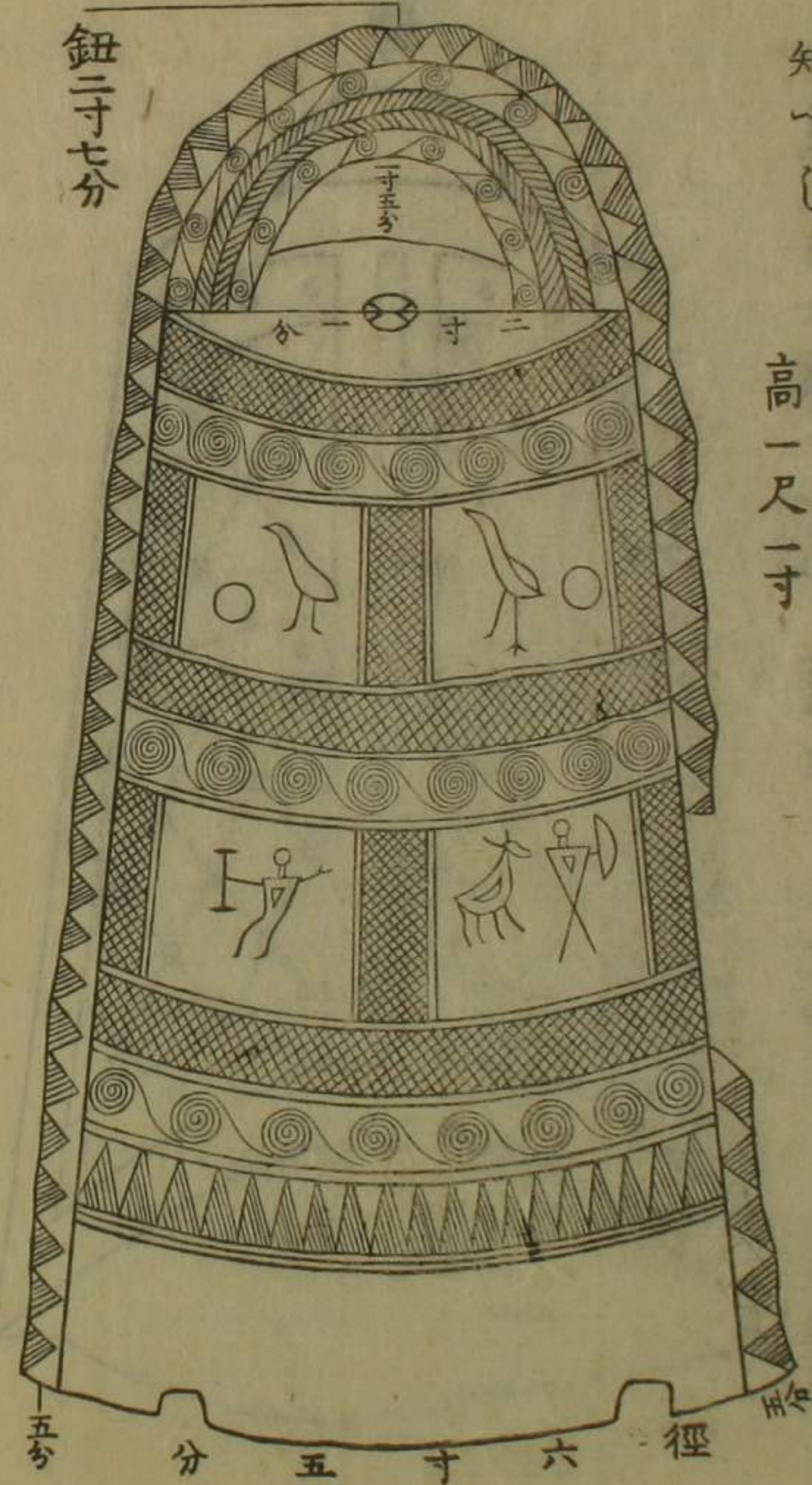


背

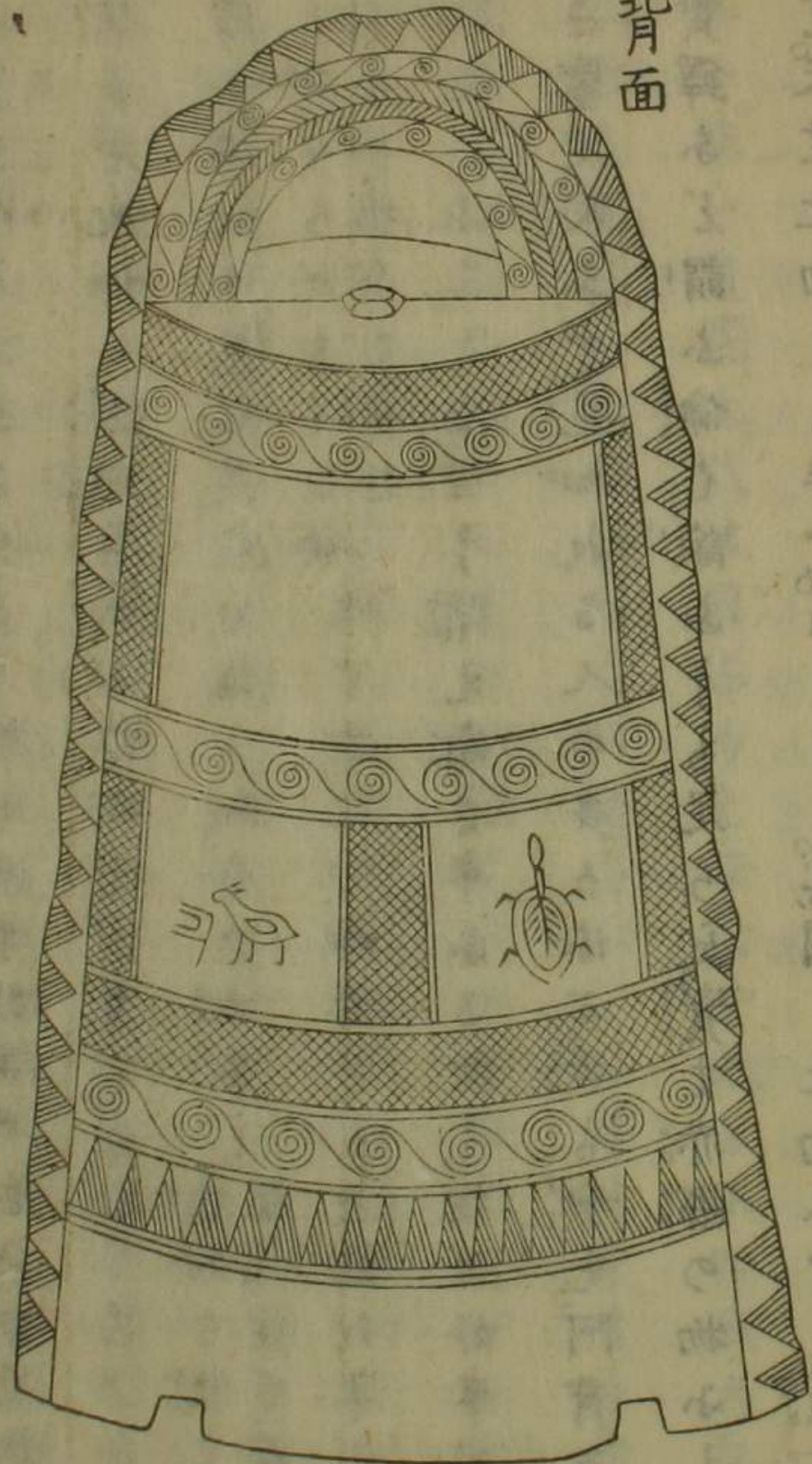
此は上件コノの鐸ともふと相似ニ古物キモノあるが其鑄付コシたる
 文様モノ古文字コモノハ鬚サシ髯ヒゲと也。斯カクて此器コノのみ。例タリ此穴コノなきは。若シく
 は異品コトある。はと谷文晁タニノの所藏シヨウある。古銅鐸コノ也。正タシ上カミに

鐸等と同じ類ふて。三穴あり。高さ一尺一寸ふして。人版と
 牛馬龜鳥など此。略形を鑄付とり。文字まとの物の形を画こ
 等ふても
 知べし。
 高一尺一寸

鈕二寸七分



背面



此て右の古器とも。舊く鐸と稱ひ來れる故なり。今も姑、此を
 謂ふふれど。神典ふは。奴豆。まゝ佐那伎ふ。此字を用ひ

とて其て其形の相類とる故と聞えとて奴氏も奴理氏の略語にて古事記
小見え佐那伎の事と古語拾遺よ上件此器どもは其形見えとり共り師比記傳小説何り
小して内よ振玉を付るき所も無きは神典奴氏佐那
伎ふぞ比如く振鳴物ふは非と古書よあえて思ひ合
彦き事れ々まば其名もはと知るき由然れを強てを屋代翁の匾鐘
と名けられ多る小従ちて右此古銅器どもを近近年おろ
ふより外あくれむ掘出と依とは世り聞え高き事ある故り世此好事家ま
と鑑定家ふぞ見知れる人の多り依古も今も阿育王が
寶鐸ふと謂ふ倫と論ふりも足ら實を赤縣の物ふも非
と天竺此物りも非と依とよし其國と此物ふと強言は

ともかゝ依物の然ばう多く其國より渡り來れる例なく
はと皇國上代此器ふと云むを欲るふ神武天皇以來
世り有來し物の様形は是を以て彼鑑定家まと世小
物識と云依人々も定め厭倦て前世の物此土中埋れ
遺ま依ふとせ事ふげ小言ふを其前世とは何時を謂ふ
と問ふよ彼佛書ある三災の世此事免きとる説字云ひ出
依よ外なく今小其説定まる事ふし佛書の謂ゆる三災
度藏志の大千世界品を委然れと此銅器此み非と諸國
く説明せるを見るべし然れと此銅器此み非と諸國
の古冢まと丘ふと此崩れて和ふらは漢がらと天竺ふら
ぬ鏡鈴をはじめ古器古物の出は例數ふるも追何履交

其品々故畜ふる人多うきせ。彼銅器を始め然る物ども此
中。大國主神の御世此物ある。彼國避此後を。世了廢
て。遂に土中埋は。或を彼大神の御世あてし人の冢
收。此物あど此。現を依べき運河。て。時く小出依あてり
め。其右の。大倭風。う。銅器。痛く。かの。周より。後。天祖降臨よ
は。あ。事。痛。う。視。め。其。和。り。古。祿。て。見。由。れ。
漢。よ。れ。若。き。故。う。然。を。見。ゆ。る。あ。り。何。あ。し。古。物。も。是。よ
准。へ。て。知。る。べ。し。其。を。譬。牙。ば。高。天。原。よ。て。天。神。の。造。ら
ち。よ。鏡。は。鐵。を。鍛。へ。て。其。隨。磨。き。用。ひ。し。を。大。國。主。神。此。御
世。の。象。有。り。鑄。て。水。銀。を。も。て。光。を。磨。り。て。作。れ。る。を。國。神。此。御
種。の。象。も。有。れ。多。く。煉。玉。の。磨。り。て。作。れ。る。を。國。神。此。御
玉。の。然。る。類。も。有。れ。多。く。煉。玉。の。磨。り。て。作。れ。る。を。國。神。此。御
王。の。然。る。類。も。有。れ。多。く。煉。玉。の。磨。り。て。作。れ。る。を。國。神。此。御
近。き。世。の。外。國。の。わ。ざ。お。習。へ。る。事。の。巧。人。を。思。ふ。め。き。ど。

か。依。事。ども。大。汝。少。巧。の。神。御。世。よ。登。く。制。し。給。へ。る。を。
昔。よ。て。以。來。ま。ご。次。く。外。國。よ。て。其。小。さ。き。も。再。傳。せ。し。
ある。こ。と。已。慥。う。稽。得。と。説。等。何。れ。ど。其。を。此。再。傳。し。か
と。し。玉。り。ま。れ。鏡。の。新。刀。を。見。せ。古。物。の。再。傳。後。の。物
ら。知。る。よ。ま。れ。古。刀。を。見。別。と。同。道。理。あ。り。上。り。出。せ。る
宝。鐸。記。の。謂。ゆ。其。新。古。を。見。別。と。同。道。理。あ。り。上。り。出。せ。る
密。之。外。云。く。此。妙。中。の。小。言。は。益。を。へ。く。も。非。交。さ。れ。ど。ま。た
此。意。ぞ。へ。と。學。問。の。力。と。合。せ。て。其。世。の。古。物。を。鑿。定。む。べ
し。已。さ。る。心。定。を。も。て。拾。ひ。獲。さ。る。物。ま。た。贖。故。是。を。以。て。い
ひ。得。さ。る。物。も。二。品。三。品。は。藏。ち。て。在。あ。り。故。是。を。以。て。い
や。古。く。天。智。天。皇。此。御。世。の。奇。異。と。稱。して。佛。法。の。異
驗。と。さ。す。所。思。看。し。彼。和。銅。六。年。よ。掘。出。さ。依。時。も。世。小。知。る
人。あ。く。其。製。の。常。小。見。る。所。の。唐。物。と。は。異。あ。る。を。上。り。も。珍
し。死。物。を。見。行。して。所。府。は。藏。免。給。ひ。々。む。此。等。の。事。を。も

思ひ通して。上件論牙依説の意を曉正稱うし。或人まよ云
昔ふそ金銀銅ふと出さる事ふく和銅の御世より始めて銅
を掘得さる云ふ其よて鏡鐸千歳此昔ある大國主神此
世よりさる金銀の有りて鏡鐸千歳此昔ある大國主神此
こぞ心を得る金銀の有りて鏡鐸千歳此昔ある大國主神此
男神の外に國々を巡り見給ひし時より韓國より金銀あり我々
子に治らるに國々を巡り見給ひし時より韓國より金銀あり我々
るを木とも成生し給へるは御齋の御く世より金銀あり我々
金を取りて用ひし御教のごと舟を物して彼邦の金を取來て
の御世より其御教のごと舟を物して彼邦の金を取來て
用ひ給ひし御代まで然る事無しは御世より神の御
哀天の御代まで然る事無しは御世より神の御
あてて神功皇御自ら韓を征とまひ是より神の御
此金を用ひ給へる和銅に至りて始めて御國より銅を
出掘其後金銀も更あり有る御心あり然れど大國
主神の御世より諸金の多し有る事御心あり然れど大國
布師此玉勝間より出されしは讚岐國の山此谷ある怪し記

彫物の類ある事ども國々ふこゝら聞えまご國々此。或そ
石窟の類は巖壁ふぞふ。此世あらぬ文字。後多は物の象
ども。人舉あらば彫付さる所も。あゝかしこふ有て。諦り
聞定めと依事も何くきや有るを。其そ何ままれ。著以書此。
因何らむ時くふそ。記し出さむ。此等も多くは。大名牟遲少
名牟遲神此御世の物ふあも有るは。
○あは歴運記考をいふし天保二年といふ年此。秋の半
よて。冬まぞふ。草稿畢れるを。今年返と取り出で。更り按
を加て。清書せしめと依あて。天保七年といふ年此。去
も月此。十日あはて五日此日。葦原一夫平篤胤

〔葦原のむとめ成独去のひせを言曾富騰よて布う。

知る人もれし。よしう阿しうは。

去は此、布せ四十とせ許で。う死れく交を正々依學びの
友ふ。十年ばらであふと。著せる書ども見せけるふ。甚く
嫌ひて。いと異し死學ぬりよせて。此、人うさ牙棄られ多
依事れ。う袖てかく有らむを思ひた、も。且は悲しく。
かおを憤ろしくも覺えしは、ふ。字成を自ららかく
け。はとろく。歎まも出る依あて。

信	殿	談	菴	郡	京
質	人	交	珥	尔	利
背	松	氏	旅	縁	還
伊	井	兄	乍	有	佐
那	美	弟	毛	氏	此
路	澄	奈	善	取	乃
里	麻	接	友	假	信
長	績	在	登	尔	濃
原	里	波	常	宿	國
信	長	飯	波	在	乃
好	北	田	往	旅	伊
何	原	乃	還	能	那

登^ト名^ナ波^ハ云^{イヒ}云^ト吾^{ワガ}氣^イ吹^{ブキ}舍^ヤ翁^{ラヂ}乃^ノ御^ミ
 前^{マヘ}各^{カノ}毛^モ各^{カノ}毛^モ誓^{ウケヒ}詞^ヒ捧^サ奉^ゲ其^{ソノ}
 御^ミ諭^{サトシ}書^ブ爾^ニ據^{ヨツ}都^ツ利^リ都^ツ甚^{イト}清^{スガ}清^{スガ}久^レ神^{カミ}
 習^{ナラハ}勤^{イソシ}在^{ヒト}人^{ヒト}人^{ヒト}在^{アリ}故^{カレ}一^{ヒト}日^ヒ打^{ウチ}
 集^{ツド}古^{イニシ}語^ヘ布^フ言^{コト}乃^ノ叙^{ツギ}信^{シノ}質^ブ伊^イ
 事^{コト}立^{タチ}談^{カタラ}合^ヒ久^ク之^レ壓^イ乞^デ吾^{アガ}父^チ翁^{ラヂ}伊^イ宣^{ノリ}
 事^{コト}立^{タチ}談^{カタラ}合^ヒ久^ク之^レ壓^イ乞^デ吾^{アガ}父^チ翁^{ラヂ}伊^イ宣^{ノリ}

給^タ良^ラ小^コ垣^{ガキ}内^ツ乃^ノ櫻^{サクラ}木^キ乎^ヲ伐^{キリ}削^{ケツ}
 氏^シ板^{イタ}尔^ニ造^{ツクリ}氏^シ氣^イ吹^{ブキ}舍^ヤ尔^ニ乞^{コヒ}申^{マラ}比^ヒ佐^サ
 天^テ翁^{ヲヂ}乃^ノ御^ミ諭^{サトシ}書^ブ乃^ノ千^チ卷^{マキ}乃^ノ中^{ナカ}能^ノ
 一^{ヒト}卷^{マキ}尔^ニ乎^ヲ太^ダ摸^{ウツシ}令^{ユラ}鑄^セ氏^シ印^{スリ}本^{マキ}登^ト爲^シ
 氏^シ春^{ハル}每^{ゴト}尔^ニ宴^{ウタゲ}樂^{アソビ}氏^シ花^{ハナ}將^{サシ}看^ム尔^ニ豈^{アニ}
 麻^マ佐^サ良^ラ自^ジ登^ト加^カ宣^{ノラ}乎^ヲ留^ル如^{イカ}何^ニ毛^モ登^ト奈^ナ
 麻^マ佐^サ良^ラ自^ジ登^ト加^カ宣^{ノラ}乎^ヲ留^ル如^{イカ}何^ニ毛^モ登^ト奈^ナ

○弘仁歷運記考跋

○二

談カタラ 婆ヘ 已オノレ 先マヅ 答コタヘ 乃ケ 久ク 良ラ 於オ 牟ム 加カ 斯シ 乃ノ
 業ワザ 耶ヤ 實マコトニ 祖オヤ 乃ノ 心ココロ 成ナリ 斯ス 須ス 伊イ 子コ 波ハ 尔ニ
 在アル 可ベ 志シ 不タユ 猶タ 豫ハズ 氏テ 其ソノ 事コト 伊イ 射ガ 西セ
 登ト 誘イガナ 美ミ 澄スミ 毛モ 信ト 好ヨミ 毛モ 相アヒ 口ク 會チ
 申マラシ 婆ハ 閑ヘ 如カ 此ク 毛モ 登ト 奈ナ 大ウ 人レ 乃ノ 御ミ 許モト 尔ニ 取トリ
 乎ハ 斯シ 聞キコ 氏テ 佐サ 比ヒ 諾ウベ 將ヨケム 善サ 登ト 言コト 許ユル 斯シ 佐サ

氏テ 百モ 部トモ 登ト 御ミ 書フミ 波ハ 雖アレ 有ドモ 此コレ 乃ノ 弘コ
 仁ニ 歷リ 運ウ 記キ 考カウ 乎ハ 清キヨ 書ラガキ 爲セ 氏テ 斯シ 與アタヘ 賜タビ
 都ツ 故カレ 頂イタミキ 令モタシム 荷カ 婆ハ 信シ 質シ 伊イ 進スム 毛モ 不シ
 知ラ 尔ニ 退シヅク 毛モ 不シ 知ラ 尔ニ 受ウケ 賜タマハ 利リ 恐カシコ 利リ 麻マ
 受ウケ 賜タマハ 利リ 歡ヨロコビ 都ツ 都ツ 立タチ 舞マフ 乎ハ 美ミ 澄スミ 母モ 信シ
 好コ 毛モ 同ト 心シン 志シ 阿ア 奈ナ 奈ナ 比ヒ 扶タスケ 氏テ 頓ヤガテ
 弘コ 仁ニ 歷リ 運ウ 記キ 考カウ

○弘仁歷運記考跋

○三

其^{ソノ}彼^{カノ}櫻^{サク}木^キ 乃^ニ 摸^{ウツ}令^エ鐔^セ 氏^テ 大^ウ人^シ 乃^ノ
 御^ミ庫^{クラ} 乃^ニ 納^{ヲサム} 波^ハ 留^ル 伊^イ 專^{モハラ} 信^シ 質^シ 我^ガ 父^チ 乃^ノ
 心^{ココロ} 乎^ヲ 心^{ココロ} 登^ト 爲^ス 留^ル 孝^{オヤ} 養^{オモ} 乃^ニ 比^ヒ 功^イ 績^サ 乃^ノ
 毛^モ 在^{アリ} 阿^ア 奈^ナ 米^メ 傳^デ 多^タ 此^{コノ} 書^フ 伊^イ 世^ヨ 那^ナ 尔^ニ
 尔^ニ 廣^{ヒロ} 婆^バ 基^キ 良^ラ 古^{イニシ} 學^{ヘマナ} 夫^ブ 人^{ヒト} 乃^ノ 爲^{タメ} 波^ハ 尔^ニ 更^{サラ}
 珥^ニ 在^{アリ} 漢^{カラ} 轉^{サヒツリ} 留^ル 須^ス 頑^{カタク} 人^{ヒト} 毛^モ 佛^{ナカゴ} 齋^{イツ} 布^フ 加^カ 癡^{シレ}

人^{ヒト} 毛^モ 吾^{ワガ} 皇^{スメラ} 大^{オホ} 御^ミ 國^{クニ} 波^ハ 神^{カミ} 乃^ノ 眞^マ 名^ナ 子^ゴ 乃^ノ 御^ミ
 國^{クニ} 登^ト 爲^シ 氏^テ 萬^{ヨロツ} 國^{クニ} 能^ノ 本^{モトツ} 國^{クニ} 祖^{オヤ} 國^{クニ} 登^ト
 寂^{イヤ} 先^{サキ} 立^{タチ} 天^テ 物^{モノ} 毛^モ 事^{コト} 母^モ 成^{ナリ} 整^ト 在^{ヘリ} 之^シ
 故^{コト} 實^{アト} 乎^ヲ 是^{コレ} 乃^ノ 書^フ 尔^ニ 見^ミ 驚^{オドロ} 伎^キ 聞^キ 恐^{カシコ}
 美^ミ 他^{アタシ} 國^{クニ} 尔^ニ 無^タ 比^ビ 伎^キ
 氏^シ

○弘仁歷運記考跋

○四

而	小	貴	布	悔	朝
在	治	伎	清	改	廷
斯	田	哉	伎	氏	乃
遠	乃	穴	御	祖	貴
津	大	米	民	祖	佐
神	御	傳	登	乃	辨
代	世	多	化	氏	悟
乃	由	伎	歸	門	氏
歷	千	加	奈	不	異
本	歲	母	麻	穢	伎
毛	餘	抑	阿	神	意
年	幽		那	習	乎

人	斯	天	尔	伎	紀
乃	故	尔	如	思	毛
遍	此	坐	斯	兼	吾
麻	由	神	之	利	翁
禰	己	地	纒	佐	乃
久	毛	耳	來	太	神
宣	一	坐	留	加	毛
賜	言	神	事	尔	神
夫	加	乃	志	牟	登
御	登	御		俱	高
言	氏	心		佐	伎
乎	大	良		可	貴

○弘仁歷運記考跋

○五止

此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。

江戸人 岩崎長世



此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。此書乃後爾添爾流奈毛。

伊吹迺屋先生及門人著述刻成之書目

塾藏版

○古史成文 <small>神代部</small>	三卷	○古史徵 <small>神代部六册 開題記五册</small>	十一卷
○古史傳 <small>自初卷至 十六卷</small>	四秩刻成	○古史本辭經 <small>五十音 義訣</small>	四卷
○神代系圖 <small>抄本 箱入</small>	一帖	○同 <small>掛軸料</small>	一枚
○靈能真柱	二卷	○神拜詞記	一帖
○太元圖說 <small>石搦</small>	一幅	○古道學神号 <small>同</small>	一幅
○弘仁歷運記考	二卷	○神字日文傳	二卷
○皇國度制考	二卷	○祝詞正訓	二卷
○天津祝詞考	一卷	○古道大意 <small>講本</small>	二卷
○皇典文彙	三卷	○童蒙入學門	一卷
○牛頭天王曆神辨	一卷	○鑿宗仲景考	一卷
		○古今妖魅考	三卷

○刻成書目

○全

○德行式 <small>石摺</small>	一幅	○立言文 <small>同</small>	一幅	○鬼神新論	一卷
○出定笑語 <small>講本附錄</small>	二卷	○悟道辨 <small>同</small>	二卷	○伊吹於呂志 <small>同</small>	二卷
○俗神道辨 <small>同</small>	四卷	○撞木隨	一卷	○木匠祖神号 <small>石摺</small>	一幅
○赤縣歷代尺圖	一枚	○石摺類	數種	○鑿祖神号 <small>同</small>	一幅
○春秋命歷序考	二卷	○武道祖神号 <small>同</small>	一幅	○日女島考	一卷
○宮比神御傳記	一卷	○天滿宮御傳記略	二卷	○叶古略	一卷
○古學二千文	一卷	○草木撰種錄	一枚		

先生の著書凡て百部、卷數千卷に迫し、右全書目、其書等の大意を別
小記せる著述書目集を見て知る。門人 生田國秀 河内盛征等記

○神徳畧述頌 一卷

○古道訓蒙頌 一卷

